1.20 ปลีน - Ezaffyrck

戶澤姑射
淺野馮靈 共譯

「ハムレット、ヂュリエット」序

帝國圖書館藏

本篇の譯者は敢て沙翁學者を以て任ずる者にあらず、然るに今西劇通なる者にもあらず、然るに今西劇さすがは所謂本邦の脚本體に飜譯せむとす、其大膽の極たる沙翁劇を、我邦の劇にして突飛なる、寧ろ驚くべきに似たり

然れども飜て考ふるに、沙翁學者たるの事實、必ずしも沙翁の會得に必要なるにあらず、所謂劇通たるの資格は、動もすれば新形式の輸入に、寧ろ煩累となるの恐なしといふ可らず、かく考ふれば、本篇の譯者が沙翁學者にもあ

明治
38 12 18
内交

らず、劇通にもあらざるの事實は、沙翁劇の飜譯家たる資格なしとの證左にはあらざるが如し

本篇の譯者は、かゝる消極的自信を以て――敢て何等の積極的自信ありとは云はず――本集の飜譯に從事せり、故に譯者は此篇に於ても、成るべく原作の意味を忠實に傳へ、原作の感想を成るべく失はぬやうに、之を邦文に移すといふの一事を以て、終極の目的となしたり、譯文は勿論在來の脚本を模範となしたりと雖も、形式の束縛多き在來の科白方を、悉く遵奉せむことは思ひも寄らず、之が爲め新舊思想、新舊言語の錯綜より起る、不調和、生硬等の非難は、到底免る可らざることは、譯者の自覺する所なり、又其科白たる、之を机上に讀むべくして、之を舞臺に演ず可らざるが如きもの多かるべきも言を俟たず、譯者は又西洋の俳優が、之を實地に演ずるに當り、如何なる抑揚あり、如何なる緩急あり、如何なる所作あり、如何なる表情あるかを、實地に研究するの機會に接したることなきが爲め、語氣聲調の變化に於て、或は當を失せし所多からむを恐る

遮莫沙翁劇は、世界文壇の寶藏なり、此寶藏は常に公開して、衆人の觀覽に供すれども、英文の素養なき人士は、之

に對して全然盲目ならざるを得ず、之を他の國語に飜譯せむとする者は、其何れの國語たるを問はず、かゝる盲目の人に對して、朧げながらも、其寶物の一班を覗き得る、一種の眼鏡を供給せむとするに過ぎず、只其眼鏡たるや必ず一種の色眼鏡なり、佛譯は佛語固有の色を帶び、獨譯は獨語特有の色を帶ぶべきは勿論なり、邦語譯は、夫れ果して如何の色なるべき、紫か青か赤か黃か、如何の色にもせよ、譯者の伎倆は、其色の如何にあらずして、其色の濃淡にあり、無色に近き淡色こそ譯者の目的とする所なれど、國語の性質に甚だしき懸隔ある本邦譯の如きは、其何人の

手に成るも、蓋し濃色の部に屬せざるを得べし、本篇の譯者は、本譯の濃淡如何に就ては、更に云ふべき辭を知らず、然れども濃くも淡くも、只だ其不透明ならざらむことの一事は、心密かに期し且つ信ぜむと欲する所なり

明治三十八年十二月　　戸澤姑射

「ロメオ、エンド、ヂユリエット」に就て

脱稿の年月

此劇脱稿の年月に關しては、所説區々にして、何れも信を置くに足らず、然れども一五九二年、即ち沙翁が二十七才の時、若くは其翌年の作なるべしとの説、尤も多數なるが如し、而して沙翁が筆を悲劇に染めたるは此作を以て最初となす、後年續々大作を出せる天才の俤は、此作に於て初めて顯れたりとの評あり、序ながら此劇の前に作せられたるものと推せらるゝは "Love's Labour's Lost," "Two Gentlemen of Verona," "Comedy of Errors" の三篇に過ぎず

刊行の年月

初めて出版せられたるは一五九七年にして、第一クォート版（印刷紙四折大の紙面）是なり、然れども此版は甚だ不完全、恐らくは作者の承諾を得ることもなく、從て正しき校訂を經ず、一部分は劇場にて速記者の筆記せるものと、又一部分は臺帳を偸見せるものなどを併せて刊行したる者ならむ、故に作者の名を掲ぐることなし、其初めて完全なる刊行を見しは、一五九九年の第二クォート版なり、現今流布せる刊本は重もに此第二版に據る、初めて脫稿してより以來、此刊行を見る迄には、幾多の改竄校訂を經たるものと推察せらる、現に第一クォート版を第二クォート版と比較すれば、啻たに誤脫と認むべきのみならず、後に改訂せられたるに非るよりは、と思はるゝ箇處幾多あり、此外クォート版は第三（一六〇九）第四（不詳）第五（一六三七）迄出でたれど何れも第二版と大同小異なり、而して一六二三年に出でたる沙翁全集、第一フォリヲ版（印刷紙二折大の紙面）には、第三クォート版を採用せり

此劇の出處

ロメオ、ヂュリエットの物語は、源を希臘時代に發し、紀元後第二世紀に出でたる、ゼノフォン、エフェーサスの小說にも、之と同じ筋の物語あり、然れども近世に至りて此物語の流布せられしは、伊太利の小說家、マッサチオの小說（一四七六年刊行）に見えたるが最初なり、其後約五十年、同じ伊太利人、リギ、ダ、ボルトなる者、同じ筋の物語を作りしが、初めて舞臺をエロナに取り、男女の名をロメオ、ヂュリエッタとせり、此物語の刊行せられしは一五三〇年なり、次て同じく伊太利の小說家、バンデロに依て此物語の大成せられたるは、一五五四年なり、次て一五五九年には、佛人ピイル、ボアトーの之が

佛譯出で、此佛譯を基礎として、一五六二年には、英人アーサー、ブロークのロメアス、エンド、ヂュリエットなる長篇の英詩現れたり、而して沙翁は、實に此ブロークの英詩を、殆んど其儘取て劇に仕組みたるなり、たゞ原作と相違せるは、原作は數ケ月に亘れる出來事なるを、五日間に縮めたること、及び劇として演ずるには止むを得ざる點のみに留まれりといふ、然れども一度沙翁の手を經るや、ブロークの寧ろ平凡なる物語は、忽ち陸離たる光彩を發し、人物悉く活動し、特殊の性格躍如たるに至れるは例に依て例の如しと知るべし

序ながら、前述のダ、ボルトがロメオ、ヂュリエッタ物語は、他と異なれる點多きが中に、其重なるものは、墳墓中にて、ヂュリエットが蘇生せし時、ロメオは既に毒を仰ぎたれど、未だ死するに至らず、此に於て悲酸なる再會の幕は演ぜられ、兩者間の會話大に人を動かすものあることなり、然るに沙翁は此脚色を知らず、全くブロークの脚色にのみ據れりしは或は惜むべき事と云ふべからむ、十八世紀の半頃、當時の名優オトエー、續てガーリックは、ロメオ、エンド、ヂュリエットを演ずるに當り、墳墓内の場に於て、此脚色を用ひ、大に當時の聽衆を感動せしめたりといふ、但し進歩したる今日の嗜好より見れば、無論沙翁の原本に及ばざること遠きものならむ

概　　概

土地及び氣候　由來南歐の拉典人種は、狂熱に富み、多情多血を以て稱せらる、此劇の舞臺たる伊太利は、南歐の粹、狂熱と多情多血との精髓を集めたる處といふべく、男女十四五才にして、既に情事を解するの風流ある

と同時に、一方には彼の恐しき族闘（エンヂウツ）の行はれたる土地なることを記憶せざる可からず、氣候は殆んど冬を知らざる暖國なるに、此悲劇の行はれたる五日間は、夏の最中（なか）にして、人の心の中にも狂熱の燃ゆるといふ季節、ベンボリオの所謂「此樣な暑い日には、人の血も騒ぎ立つ」（第三幕第一場）なる酷熱の砌なり、さらでだに溢るゝやうなる血と情とは、沸騰點を昇降し、可愛き者益す可愛く、憎き者愈よ憎く、平靜なる心には、想像だも及ばざる行爲を敢てするには至りしならむ

人物及び事件　美はしきエロナの市は、全伊太利に於てエニスの市に亜ぐる盛大の一都會なるが、此市に君臨せる者を、エスカラス公といひ、其下に相疾視せる兩個の豪族あるを、一はモンテーグ、他はカプレットといふ、政權の爭奪こそなけれ、恰かも我京都に於ける源平兩家の如く、一家一族は云はずもあれ、召使ふ婢僕の末に至る迄、代々相反目し、屢ば鬪爭を惹起せり、されば此兩家の一に生れ來りたる者は、他を憎み嫌ふ樣に生れ落つるが常なるを、偶まモンテーグ家の獨り子と生れ來りたるロメオは、是も亦カプレット家の獨り子にして、跡取女と生れ來りたるヂュリエットと一目見るより、互に激烈なる戀愛を起し、万難を排して進まむとし、遂に身命を抛つに至れり

初めロメオは、其性質溫順にして德望あり、エロナ市民の誇りとする所の、青年なりしが、怨敵の一族なるロザリン嬢に戀焦れ、かにかくと云寄りしに、嬢は其性端嚴にして冷酷、生涯獨身を以て世を終らむと決心せし程の女性なれば、斷然ロメオが意に從はず、ロメオこれより怏々として樂まず、白日窓を閉ぢて呻吟し、夜間は獨り家を拔け出て、郊外を彷徨するといふ

有様なるに、從兄ベンボリオなる者之を諫め、心頑なゝるロザリンを戀ふるを止め、廣く眼を開て、世間の美人の間に戀人を求めよと告げ、折しも其夜、怨敵カプレット家にて催せる假裝舞蹈會に、假裝して忍び込み、當然來會すべきロザリン嬢と他の美人とを比べ見よ、然らばロザリンにます美人なしとの汝が夢は破れ、今迄驚と思ひしは烏なることを發見すべしとの勸告に、さることのよもあるべしとは思はねど、ロザリンの姿を眺め得んとの考にて、此勸告に從ひ行いて見しに、案外にもベンボリオの詞違はず、一人の美人を見るより、呆然として立つこと暫く、忽ちにして今迄のロザリンに對する戀は、全く一の愚かしき空想に過ぎざることを悟れり、此美人こそは即ちカプレットの嫡女ヂュリエットなるが、ヂュリエット亦ロメオを一目見るより、郎ならではとの心制し難く、相思の情は一瞬間にして成立し、互に其名を傍人に問ふに及んで、初めて其怨敵たることを知り、痛恨措かず、さるも尙ほ之を思ひ諦ること能はず、一難關に逢ふ毎に、募るは戀の習とて、宴果てゝ後、ロメオは一旦歸宅の途に就きしが、再び戻り來りて、闇夜墻壁を超え、カプレット邸の果樹園に忍び込み、戀てふ不思議の案内者に導かれ、如何にしけむヂュリエットが寢室の下に至れり、此時ヂュリエットは、寢室の窓に姿を現し、闇夜に向て心中の秘密を獨語しけるが、端なくもロメオに立聞され、ロメオは折こそ善けれと名乘り出てければ、二人が心中は譯もなく吐露され、遂に明日を以て結婚の事を取計はむとの詞を以て別れたり、ロメオ辭し去るの時、夜は既に明離れんとしたるが、彼は其足にて直ちに、老僧ラウレンス上人の庵室を音づれ、告るに昨夜の事を以てし、今日二人が爲めに、密かに結婚の式を擧げ呉れよと嘆願

せり

此上人は沙翁が描きたる性格中一異彩を放てる高僧なるが、塵俗の外、情念の上に立ち、哲理の研鑽人事の考察を以て目的となすこと、熱火燃ゆるが如き宗教家の如くにはあらずして、寧ろ冷静なる哲學者の如し、さるも尚ほ人間に對しては暖かき同情を有し、市民を見ること子の如かりければ、今ロメオが語る所を聞き、初めは其操守の軟弱なるを責めけるが、忽ち又思返し、此秘密の結婚に依て、前年來結んで解けざりし、兩豪族の舊怨を解くことを得ば、何の幸福か之に若かむとの考を以て、ロメオが乞を諾しければ、ロメオは此旨をば、折から使者として尋ね來しヂュリエットが乳母に告げ、其日の午後ヂュリエットをして上人の許に忍び來らしめ、其處にて首尾克く婚儀を濟まし、今夜こそ又々忍び行きて、新婚の歡樂を盡さむとの滿々たる希望を以て別れたり

さて此秘密の結婚後一時間にして、此悲劇の動機なる一大事件は生じたり、初めカプレット夫人の甥、タイバルトなる青年、昨夜の假裝會に、ロメオが假裝して忍び込みしを知り、氣早者の惡まれ者とて、其場に斬殺さむといきまきしを、カプレットの爲めに制せられ其意を果さず、遺恨骨髓に徹したりけむ、翌朝直ちに決鬪狀をロメオに送りしに、ロメオは家にあらず、依て其處此處と尋ね廻りしに、其日の午後ゆくりなく路傍にて、ロメオが日頃の親友にして、エロナ公の近親なるメルクチオ――此性格も亦此劇中の花役者にして、圓轉滑脫の才あり、諧謔縱横、西人の喜ぶ人格を具ふ――及びロメオが從兄ベンボリオを認め、ロメオの行衛を尋ぬる中、折惡しくもロメオは、彼の秘密の結婚を果して、間もなく此處に來り合せしかば、

タイバルトはロメオに向ひ讒謗罵詈を極め、決闘に誘はむと挑みしが、ロメオは更に應ぜず、一時間前に結婚したる我妻の親族ぞと思へば、闘はむの念などは少しも萌さゞるに、タイバルトは益す罵詈を極めしかば、居合せたるメルクチオ大に怒り、ロメオに代りてタイバルトに闘ひを挑み、忽ち丁々發矢の響となりしに、ロメオは二人の間に割て入り、そを留めむとする刹那、卑怯なるタイバルトは仲裁者の身の蔭よりメルクチオを刺して奔り去れり、かくてメルクチオは程なく落命に及びしかば、遺がのロメオも大に口惜しく思ひ、且つはタイバルト故に彼程の侮辱を受け、己が名譽も傷けられし今、ヂユリエット故にこそ、今迄はめゝしくも忍びてありしか、いつまで忍びてやあらむと思ふ處へ、何とか思ひけむタイバルト再び引還し來りしかば、此度はロメオより挑みて雙方抜合せ、遂にタイバルトは其場に討たれて敢なくなれり、此騒動間もなくエロナ公の耳に入り、公は直ちにロメオを追放に處する旨の宣告あり

さてカプレット家の一室には、秘密の結婚を果して、歸宅したるヂユリエット、今夜新郎の忍び來るを想ひ遣り、嬉しく耻かしく又待遠しく、「日神の輦も疾く馳せて云々」の、此篇中屈指の獨語あり、沙翁が作中にもこれ程のは、二つはないとの評あるは此處なり、待つは一日千秋の思ひにて、夜の黒幕よ早や下れ、さてロメオを早や送り越せと、待焦るゝ最中、乳母の外より還り來れるに、如何なる消息やあると問へば、乳母はたゞ泣き倒れてたわいもなし、ロメオが如何にかしたると繰返し尋ねられ、漸く乳母は答ふるともなしに、彼の御方は殺されしと云ふに、さては、ロメオが人手にかゝりて、敢なき最期を遂げしかと心も狂ふばかりに、ありし顚末を樣々に尋

ぬる中、乳母が「彼の御方」と云ひしは、タイバルトにて、その下手人こそロメオなりと聞き、彼の樣な優しの殿御に、さる恐ろしき擧動ありしとはと、日頃親しかりしタイバルトを悼むと共に、ロメオが心ばへを嘆きしが、否々罪はタイバルトにあらむと思返し、ロメオの生存を喜ぶと同時に、即座に追放と聞きて慟哭し父母の訃音を聞くとてもか程には悲しからじ、ロメオの追放と聞きては、父も母も、タイバルトも我身も皆悉く死せりといふに等しく、限りなき際涯なき死てふ意味は其中に籠れりと嘆く、勘平の死を聞きしも輕の嘆きに似て、其深刻なる其大膽なる、其能く人情の眞を吐露せるは、則ち比すべくもあらず、乳母も慰めかねて暫しは共に泣くばかりなりしが、ロメオが今潛伏せる隱れ家を承知し居れば、今夜いかにもして訣別の爲め、此處へ伴ひ來らむと慰め、さて直ちに其方を指して出で行きつ

却説ロメオは、タイバルトを殺害しける時、己れは其場に殘りて、此凶行の責を負はむと主張しけるが、ベンボリオの勸告否み難く、其場を逃れて、ラウレンス上人の庵室に忍び、事の成行を見、エロナ公の宣告を聞合さむと潛み居けるが、上人はロメオが爲めに外出して世の風聞を聞合せ、間もなく歸り來り、公の慈悲ある御沙汰にて死一等を減じ追放に處せられたりと告ぐ、ロメオかくと聞きてヂュリエットの姿を見るを得ざるに至れるは死に優れる無慈悲の宣告なりと悲み、エロナの市にあるものは、犬、猫、鼠たりとも、ヂュリエットが姿を眺め得べく、腐肉に生く蠅さへも、彼女が雪の腕に接り、唇をわたりて不朽の幸福を偸むを得べきも、我はさることもなし得ずと嘆くを、上人は且つ諫め、且つ慰むる中、ヂュリエットが乳母尋

ね來り、今夜訣別の爲めヂュリエットが許に忍び給はれと、彼女が消息を傳ふ、上人も之に力を得て、此上は乳母の言に從ひ、今夜は新婦の許に訣別の會合をなし、夜番のまだ張られざるに去れ、さらずば曉に乘じ姿を變して去れ、さて其上はエロナを後に見棄てゝマンチユアに赴き、其處にて兎も角も生活の道を求めよ、さらば折を見て汝等が結婚の次第を披露し、相互の父母を融和し、エロナ公の宥恕を乞ひ、汝を再び此地に迎ふべしと說諭し、これにてロメオも漸う元氣を回復し、其言に從ふことゝなし、乳母も其旨を含みて去れり

さて舞臺は轉じて其翌日の曉方、カプレット邸ヂュリエットが寢室、新郎新婦別を惜むの場となれり、ロメオは云ふ今鳴きしは雲雀ならむ、さらば夜も明けつらむ、立去らざる可らずと、ヂュリエットはいふ、あれこそは此程夜なく〳〵、庭の柘榴の樹に來鳴く夜鳴鳥（ナイチンゲール）なり、曉にはまだ程ありと、ロメオは又いふ、げに卿のいふ如く夜鳴鳥ならむ、げに夜はまだ中々に明けはせじ、よしや捕へられて殺さるゝとも、卿さへそを望み給はゞ、口惜しとも思はず、わが本懷之に過ぎじと、ヂュリエットかくと聞き遽てゝいふ、否々あれこそは夜鳴鳥ならず、雲雀なり、夜は明けたり、次第に明るくなりゆくなるを、さらば之にて別れ申さむ、マンチユアに着かせ給はゞ消息を怠り給ふなと、ロメオいふ、次第に明るくなりはすれど、暗くなりゆくは身の行衛と、かくて互みに別を惜む中、乳母來りて、ヂュリエットが母夫人所用ありて今茲へ來まさむと告ぐ、これにてロメオ窓を攀下りて地上に立つを、ヂュリエット上より見下し、只ならぬ胸騷ぎこそせらるれ、其處に立たせ給ふ御姿、何とやらむ君を墳墓の底に見まゐらせ申すが如き心地せらる

いは、妾が眼や、疲れたる、君が御面の色や、青ざめたる、と云へば、ロメオ答へていふ、我眼にも卿の姿、將たしかく見ゆるなるを、こは悲み故に互の血潮減ぜしにやあらむと、これぞ二人が生別の名殘とは後にぞ想ひ合されける、かくてロメオが去ると同時にヂュリエットが母夫人入來りて、娘が泣顔を見、こは全く從兄タイバルトが死を悲むの涙ぞと思違ひ、かにかくと慰め、さていふやう、汝は優しき父上を持たれしものかな、父上には汝の愁嘆を慰めむとて、彼の美男の聞え高きパリス伯に、汝を娶はすこと定め、明後日を以て婚儀を擧げんとなり、よも其方に不足はあるまじと、こはエロナ公の親族なるパリス伯が、疾くよりヂュリエットに懸想し、父カプレットに向ひ、娘を妻にと所望すること屢なるに、父は遂に心傾き、殆んど獨斷にそを承諾しけるなり、さるにヂュリエットは今初めて母より此事を

聞き、且つ驚き且憤りて不平をいふ中、父カプレットは後より入來り、娘が不承知と聞きて怒ること一方ならず、不孝者、恩知らずと罵り、此上は父の言に從ひ、パリス伯に嫁げばよし、さもなくば最早父とも思ふな子とも思ふな、此家の中へも置き難し、食を路傍に乞うて餓ゑも死ねかしと、席を蹴立てゝ出て去りたり、娘の情深く意志強きに引更へ、冷淡にして同情なき母夫人、將た娘を棄てゝ出行きたり

ヂュリエット是に於て詮術を知らず、頼むは只一人のラウレンス上人あるのみと、直ちに行て庵室を訪へば、パリス伯は既に庵室にあり、上人に告るに婚約の成りしことを以てしたる後なれば、上人もとつ追つ思案に暮れ居たる處なりしが、躰よくパリス伯を還らしめて後、ヂュリエットの樣子を伺ふに、如何にもして此再度の結婚を避るの方を示し給はずば、茲

に一箇の懐劍あり、一死以て終りを全うせむのみと、決心の色動かす可らざるものあるを見濟まし、重婚の恥辱を敢てせむよりは自ら死なむとの覺悟ある上は、死する程の危險を冒さば、此難場を遁れ得べき方案あり、試むべきかといふ、ヂュリエット俄かに勇み立ち、此難場をさへ遁れ得べくば、火水の中は愚か、如何なる危險をも厭ふ所にあらず、早く其方を授け給へといふに、上人一瓶の麻睡藥を取出し、此奇藥を服する時は、脈搏止み呼吸絶え、宛然死するが如きもの四十二時にして、やがて又蘇生すべし、卿果して死を冒すの勇あらば、今より直ちに歸宅して父に向ひ、パリス伯との婚約を快く承諾せよ、さて結婚日の前夜寢に就く時、密に之を仰げ、然らば翌朝卿の家人は、卿を以て頓死せし者と誤想し、國風に從ひ當日卿を先祖代々の一族の墳墓に埋葬せむ（一族の墳墓とは、是は一の大なる穴倉樣の構造にて、死者ある毎に、柩のまゝ之を地中に藏むるものなり、地中に殷けたる骨堂と見るも可ならむ、只だ遺骸を燒かずに葬るの差あるのみ）さて一方には、マンチュアなるロメオの許に一書を送り、此一伍一什を報知し、卿が蘇生の刻限來らぬ中に、此地に忍歸らしめ、墳墓を穿て其中に入り、卿の蘇生を見て伴ひ出し、更にマンチュアへ伴ひ去らしめむといふに、ヂュリエット大に喜び之に從ふことゝなし、急ぎ歸宅して父母に向ひ、嚮に父母の命に背きし不孝を詫び、パリス伯との結婚を承諾の旨述れば、父の喜悅一方ならず、初めは木曜日と定めし結婚日を、更に水曜日の明日に繰上げむとて立騷ぐを、ヂュリエットは獨り寢室に退き、常は傍に寢臥せしむる乳母をば母の許へ出し遣り、さて彼の一瓶を取出し、仰がむとすれば、遺がにたゆたふ心を推鎭め、湧出る樣々の疑念を制へ〳〵て、遂に悉く飲了るに、間もなく前後を辨へずなりぬ、かくて豫期の如く、翌朝家人に發見せられ、嘆かれ哭かれて型の如

く葬られ了んぬ

さて此日マンチユアなる、ロメオは、豫てより信頼せる家僕のエロナより一悲報を齎せるに會ふ、是他ならずヂユリエット頓死して既に埋葬せられしとの訃音なり、且つ驚き且つ悲みつゝも、上人よりの書面やある、傳言やあると問へども、なしと答ふ、されど愛妻の死せることは今や疑なし、此上は存生へて何樂みのあるべき、己れもヂユリエットが墳墓中に入り、其側に死せむと決心し、甞て或る街上にて貧困なる藥劑師の店あるを見、國法の販賣を嚴禁する毒劑の必要あらば、かゝる店主に啗はすに少額の黄金を以てして、以て我手中のものとなすことを得んと、獨語ちしことあるを想起し、直ちに件の藥劑師が店を敲き、一服忽ち死する底の毒劑を購取り、急ぎ馬を馳せて、エロナに忍び還り、ヂユリエットが墳墓の地に入り込みしは、早や深更の頃なりけり、此處にて伴ひ來りたる家僕には、父への遺書を托して明日早朝手渡しすべき旨を云渡し、且つ直ちに此場を立去るべき由、死を以て强迫し、さて己れ一人にてカプレット家の墳墓の前に至り、携來れる器具を以て土を發掘し、墳墓の入口を押開けたり

然るに此以前より片蔭に隱れて此有樣を覗居たる者あり、是れ別人ならず彼のパリス伯なるが、伯は結婚日の朝に至り、焦れ〳〵て、漸う目的の九分を達したる今、命にも替へ難きヂユリエットに別れ痛哭措かず、これより夜な〳〵其墳墓を音づれ、花を撒き水を注ぎ、せめてもの心遣りにせんと、今夜しも一人の小姓を引連れ、來りて吊らひ嘆きつゝありしが、見張の爲めとて墓地の彼方に遣し置たる小姓が、人來れりとの合圖に、傍に退き覗へば、驚くべし何者とも知れず、今花を撒き水を注きし計りの墳墓を

發掘し始る者あらむとは、更に熟視すれば、是ぞ追放中のロメオなるに、怒心頭より發し、逮捕し行かむといきまくをロメオ斷乎として之に抗し、遂に雙方太刀拔合せて戰しが、ロメオ、バリスを斃すに及び、バリスは息の下より、汝若し情を知らば、我が亡骸をヂュリエットが傍に横たへ呉れよといふ、ロメオ之を諾しつゝ、近よりて其死顏を熟視すれば、何ぞ圖らむ、こはヱロナ公の近親なるバリス伯なり、此時ふと想起しゝは、今日マンチュアよりの途すがら、家僕の談話にヂュリエットは、バリス伯と今日結婚すべかりし云々の語ありし樣に覺えしことなり、こは夢なりしか、將た我心我思ひの亂れにや、遮莫同じく不幸者の戸籍に上りし人なればとて、愍懲に握手して、さて遺言に任せヂュリエットの傍に押並べてかき据ゑつ、己れもヂュリエットの側に座し、不思議にも顏色未だ衰へず、生けるが如くな

る愛妻の尙ほ丹花の如くなる唇に接吻して名殘を惜み、やがて携來れる毒劑を仰げば、寸時の間に息は絶えたり

さても彼のラウレンス上人は、番僧ヂョンと云へるを使者として、急ぎ信書をロメオの許へ送屆くべきやう出し遣りたれば、件の使者や今歸る、ロメオや早や來ると待わびてありし處へ、番僧歸來りて告るやう、昨日御使命を承りて後、同じ宗門の徒弟を誘ひ同行せむとて、其徒弟の行衛を尋ぬる中、さる病家に立寄りしに、折あしく檢疫官の爲めに捕へられ、疫病の疑ある病家に入りたればとて、其儘拘留せられて、今に至り漸う釋放せられたり、されば御書面は遂にロメオの手に屆くること能はざりきと、上人の驚き一方ならず、ヂュリエットが蘇生は瞬間に迫れるに此上は一刻も猶豫ならず、自ら往いて墳墓を發き、ヂュリエットを伴ひ還り、一先づ此庵

室に留め置き、さてマンチユアへ送り届けむと、乃ち鐵挺、鶴嘴、鍬を携へ、時を圖りて、カプレット家の墳墓へと忍び來て見れば、ロメオが家僕の、尙ほ墓地内に彳み居たるに逢ひ、ロメオが既に玆にあるを聞き、こは樣子只ならずと、急ぎ墳墓の前にいたれば、鮮血四邊を染め、刀刃の血に塗れたるが散亂せるさへあるに、墳墓は既に發きてあり、入りて見れば、こは如何にロメオはヂユリエットを抱けるまゝ死してあり、更に其傍にはパリス伯の死骸も横はれり、さてはと思ふ中、ヂユリエットはやや身動きを始め、間もなく全く蘇生し、我夫やあるくと呼ぶに、上人徐ろに人力の如何とも爲し難き大なる力が、我等の計畫を齟齬せしめ、ロメオは既に死してあれば、何事も天命と諦め玆を去れよ、さて尊き尼ともなりて一生を送れよと諭す中、外面に當り物騷がしき音して、人の來る樣子なるに、即刻出てよと迫れども聽かず、足音は次第に近づき來り、事の急なるに、止むを得ず上人は只一人出去りつ、後にヂユリエットはロメオの手中に毒を仰ぎたる碗のあるに眼を注ぎ、己れも殘瀝を嘗めて死なむと欲すれども、碗底一滴を餘さゞるに、せめては唇上に附着せるものをと數多度接吻すれども得ず、遂にロメオが腰下の短刀を認め、之を拔取て直ちに胸元を刺透しぬ

これより先きパリス伯が召連れたる小姓は、伯が不思議の曲者と搭闘を始めしを見、急ぎ其場を去り、夜番の者を尋ね、今しも玆に伴ひ來りしが、夜番の長は此有樣を見て、直ちに四方へ部下を派し、墓地の内外を搜索せしめしに、先づロメオが家僕の尙ほ潛み居しを捕へ、次で上人の今しも墓地を去らむとする所を捕へ來れり、又一方には此趣をエロナ公に報じ、カプレット、モンテーグの兩家へも急報せしかば、やがて公の臨場あり、カプ

レット夫婦の馳せつくるあり、モンテーグの悄然と來り會するあり、何れも事の不思議に且つ驚き且つ悲む中にも、ヂュリエットの屍骸に、自ら胸元を刺せる痕あり、流血淋漓として、身中に尙ほ溫氣あるを怪めり、又老モンテーグは彼が妻ロメオの追放を嘆くの餘り、昨夜遂に空しくなれるに、今亦我子のかゝる最期を遂げたるを見る悲しさよと嘆くこと大方ならず、凡て悽愴悲慘を極む、やがて公は捕囚ける、嫌疑の者共を一々檢問しけるに、上人は始終の顚末を物語り、ロメオが家僕の携へたる、父モンテーグ宛の書面も、公の手に由て披かれ、前後の事情凡て明白となれり

さて事情明白となれば、誠に悶むべく悲むべきは、ロメオ、ヂュリエットが身上なり、かくも純潔可憐なる二人の戀も、相互の父が年來の宿怨を固執するの結果、家と家とが確執の犧牲となり了んぬる哀れさ、又雙方の父母に取りては、何れも樫の實の一粒種の愛息愛女を失ひし悲さ、これぞ兩家が嫌惡の念に對する天罰なる、天は正しく戀愛を以て、嫌惡を刑したるなり、是に於て遉がのカプレット、モンテーグも、今は我慢の角を折り、互に手を取り合して、幾代の宿怨を、擲ち、モンテーグはヂュリエットが爲めに黄金の紀念像を建設せむと云へば、カプレットもロメオが爲めに、推並べて之に劣らぬ紀念物を建設せむと云出で、かくて此悶むべき戀物語は其悲しき脚色を、目出度き兩家の和解の中に終れり

性格

此劇中の重なる性格は、いふ迄もなくヂュリエットなり、之を「ハムレット」のオフィリア、「オセロ」のデスデモナと對比すれば、尤もよく其特殊の性

格を識別し得べし北歐寒冷の地に生れたるオフイリアがそつけなき寧ろ意氣地なき戀に比し、此南歐溫暖の地なる伊太利美人ヂュリエットが、猛烈にして憚る所なく、燃ゆるが如く、鎔るが如く、沸ゆるが如くなる戀は、誠に好き對照といふべき歟、デスデモナが溫順にして貞淑なる戀は、少しく南歐的ならざるが如き感あれど、父母を棄て財産を棄て、世のひとしなみの乙女が厭ふなる黑人の許に奔れるの意氣は、道がにエニス婦人なり、而かも其戀の殆んど全く感覺的ならざる點に於てヂュリエットとは大なる逕庭あり

人或はヂュリエットが戀を以て、徹頭徹尾感覺的なりとし、彼女が感想言語擧動に些の乙女らしき初々しさなきを咎め、其ロメオを見るや單に外貌の美を見るのみにして、才能性質の如き少しも知る處なく、たゞ一瞥の戀にして身命を抛つに至れる輕忽を非難するものあり、實に世に處する一の安全なる道は、かゝる戀を爲さざるにあり、人を戀はゞ能く其性能を詳かにし、其外貌言語擧動を參酌し、又成るべくは財産の有無等を考へ、而して後に戀ふるが安全の渡世法には相違なし、然れども戀なるものは、其の純なる形に於ては、恐らく頭腦の識別を許すの暇なく、たゞ心胸（ハート）に譯もなく感ぜらるゝものなるべし、殊に利害得失を考慮して、後に愛憎の事をなすの經驗なき、白糸の如き少女の戀に至ては、其戀たるや純然たる心胸の戀なり、頭腦の戀にはあらざるなり、自然が與へたる儘の性情を、さながら養成し來りたるヂュリエットは、技工を以て己が感想を調和するの狡猾手段を知らず、是を以て其云ふ處行ふ處、悉く少女の自然を、有の儘に露出して顧みず、此の如きは素より、實際的なるべき筈の倫理學より見て

は、決して一概に稱揚すべきにあらざらむも、たゞ戀なる現象に就てのみ觀察すれば、誠に愛すべく嘉すべく而かも憫むべきものたらずんばあらず、彼女が言語行動の常に大膽にして憚る所なく、直情徑行的なるは、會まこと其自然の子なるを證明するものゝみ、されば單に彼女が戀を以て感覺的若くは肉慾的とのみ見るは不當なり、自然の子が有せる純乎たる本能に源を發し、肉と精神との微妙に接觸せる所に横溢したる情（パッション）の洪水と見るを以て至當となすべきか

ロメオが性格は、ヂュリエット程著明ならず、然れども其自然の寵兒にして、技工的處世術の奴隷たらざるに至つては則ち一なり、たゞ彼は溫厚瞳直の青年にして、情の炎はヂュリエットに劣らず明かに溫かなれども、戀てふ甘酒（うま）の醉心地に、心を朦朧たる夢幻の境に逍遙せしめ、蜜の如き空（スペン）想（シー）の花園に優遊すること多く、ヂュリエットの如く實際的（ソリッカル）ならず、從てヂュリエットの如く果斷ならず、大膽ならず、近松の心中物に見る色男の溫厚さと意氣地なさとをさへ有するに似たり

此外ラウレンス上人、メルクチオ、及び乳母の性格は此劇中の著名なるものなり、たゞメルクチオが頓知頓才に富み、諧謔縱横なる人となりは、彼が言語の多く洒落（しやれ）、口合を以て充たさるゝが故に、譯文に於て、十分なる俤を傳ふること能はざるは譯者の遺憾とする所なり

ダウデン氏曰く、ロメオ、ヂュリエットの二人を圍繞せる種々の人物は、己がじゝなる見界より、自然に戀に對する樣々の批評家となるやうに脚色せらる、老カプレットの心には、戀愛其他種々の情緒は父の權力に依つて決定せらるべき者と思はれ、彼が妻カプレット夫人は結婚はたゞ渡世上の便宜の爲めと心得、又乳母の考には結婚は快樂を好む本能の滿足に

外ならざるが如き心地し、智力の發達過大なるメルクチオは、心胸（ハート）は頭腦よりも力強きことを示す程の情を感ずること能はざるものから、戀を嘲笑して措かず、尤もそは實際心から戀を輕侮するにあらずして、己れさるものに緣遠く、別して女色に對する博愛主義を懷抱するに原因す、又ラウレンス上人は閑寂なる庵室の窓より、若くは野外の朝露の中より、人間の情緒を觀察したり云々と蓋し簡短なるされど適切なる評言なり

最後に此等の性格と事件とを發展せしむるに、沙翁は殆んど他に類例なき程抒情詩的の科白を用ひて此劇を作成したり、されば此劇は劇としての價値よりも、寧ろ一箇の抒情詩としての價値、恐らくは一層大ならむとの評さへあり、而して是れ即て、此劇の沙翁が年少時代の作なりと判定せらるゝ、理由の重なるものなりとぞ

譯者識

ロメオ、エンド、ヂュリエットの悲劇

登場人物

エスカラス　ゼロナ公
パリス　右の近親なる若き貴公子
モンテーグ（カプレット）　相反目せる兩豪族の家長
某老人　カプレット家同族の者（多分家長の叔父）
ロメオ　モンテーグの嫡子
メルクチオ　ゼロナ公の近親、ロメオが友
ベンボリオ　モンテーグの甥、ロメオが友
タイバルト　カプレット夫人の甥
ラウレンス上人　聖フランシス派の僧
番僧ヂョン　同派の僧
バルセイサ、アサムソン、グレゴリー　ロメオが家來
　　カプレットの家來
ピーター　ヂュリエットが乳母の召使ふ僕
アブラハム　モンテーグの家來
　　此外藥劑師一人、樂人三人、小姓二人（内一人はパリスの召使）及び醫吏一人
モンテーグ夫人　モンテーグの妻
カプレット夫人　カプレットの妻
ヂュリエット　カプレットの女
右乳母
　　其外ゼロナの市民、兩家の族人、假裝舞踏者、守衛、夜番、從者等大勢
口上人

場所

ゼロナ及びマンチュア

序言

ロメオ、エンド、ヂュリエットの悲劇

序言（プロログス）

口上人登場（コーラス）

口上人　舞臺は伊太利亞、美しやゼロナの市に、肩を並ぶる兩家の豪族、舊き昔の怨恨より、新たに開く修羅の場、流す血潮は市民の腕に韓紅、かゝる怨敵同士の腹よりも、生れ出てたる因果の男女、互に思ふ仲となり、添遂げむとの計畫も、蹟の嘴と齟齬ひ、果は互の身の破滅、親と親との爭ひも、共に埋めて兩家の和解、その因果なる戀物語、男女が親の憤り、可愛い息子、可愛い娘の最期にて、漸う融けし一伍一什、此のゆくたてを二時にて、御覽に入れるが我等の役目、御聽づらいを御忍びあらば、足らはぬ所は一同が、精々勵みて高見に、叶はむことを期せむと敬て白す

と口上人退場

第一幕

第一場　エロナ　大道側

カプレット家の家來サムソン、グレゴリー、劍と小楯とを若けて登場

サムソン　コレ、グレゴリー、決して人の風下には立つまいな

グレゴリー　左樣〳〵、それこそ端下者と笑はれう

サム　いや、さしたる事でなくとも、腹が立つたら用捨なく拔かうといふ事

グレ　いかにも荊棘、枳殼へ首を突込んだら、一生懸命に拔くが宜いわさ

サム　己や激すると直に斬るが習

グレ　處が斬る迄に、直には激されぬ

サム　イヤ、あの、モンテーグ家の犬を見てさへ、直ぐに激する

グレ　待てよ、激するとは騷ぐ事、蹈留るが勇者の擧動、さすれば汝が激するとは、コリア遽てゝ逃げ出すとの事であらう

サム　イヤ、彼處の犬を見てさへ、己や激して蹈留るわ、ハテ、モンテーグ家の者に街で遇うたら、男でも女でも、塀際（人道の尤も安全なる部分）は己が通る

グレ　それが即ち汝の弱い證據、塀へ推つけらるゝは、弱い者と極つて居る

サム　成る程〳〵、さればこそ女はか弱い者とて、壓付けらるゝが常とあるぢやに依て、己やモンテーグ家の男ならば、塀際から推退けて通り、女子ならば塀際へ壓付て遣る所存ぢや

グレ　イヤ喧嘩はお互の主と家來たる、我々男共で引受るわ

サム　それは如何でも、己やどんな酷い事も厭やせぬ、男共と喧嘩をしたら、女子共にも渡り合ひ、彼奴等の首を落して呉れる

グレ　アノ女子共の首を

サム　おゝさ、女子共の首とても、又は女子の首即ち節操とても、汝の心持次第、勝手な意味に取るがよい

グレ　それは痛いか痒いか、落された時の、女子共の心持次第ぢや

サム　イヤ此身の根の續く間は、落さずには置かぬわい、そして己といふ此肉の塊も、滿更棄てたものではないと人の評判

グレ　魚の肉でなくて幸福若し魚なら不味い干魚であつたらうに、ヤア〳〵、扱いた〳〵、モンテーグ家の男奴が、二人で此方へ來るぞ〳〵

アブラハム、バルセーサー（モンテーグ家の家來）登場

サム　己やもう扱いたぞ、汝は喧嘩を吹懸けい、己や汝の尻馬に乘らうぞ

グレ　何と尻を向て逃げると

サム　そのやうに怖がるには及ばぬ

グレ　ナニ、汝などが怖いもので

サム　此方から始めると、法律とやらの手前、口が開けぬに依て、先方から始めさせう

グレ　己や通り違ひながら、顏をさかめて睨むで遣らう、すりや先方の心持次第で、怒るなりと何なりするであらう

サム　イヤ心持次第ではなうて、膽玉次第であらう、己や又彼奴等に向ひ、指を嚙むまねをして呉れう、若しそれでも默つて引籠めば、それこそ彼奴等に大恥をかゝせたといふものぢや（指を嚙むは嘲弄の身振なり）

と通り過ひながら先方の兩人に向ひ指を嚙む

アブラハム　コレ、今指を嚙んだは己達に對してか

サム　いかにも己は指を嚙んだ

アブ　それは己達に對して嚙みやつたのか

サム　（グレに向ひ旁白）左樣、と答へても、法律の手前差支あるまいな

グレ　イヤある〳〵

サム　否、己は汝達に對して指を嚙んだのではない、とはいへ指を嚙んだ事は嚙んだがどうした

グレ　貴樣達は、喧嘩を買ふ心算だな

アブ　喧嘩を買う、イヤ左樣な事が

サム　若し左樣なら、己が相手をする、己ぢやとて貴樣程の伎倆は有て居

るわ

アブ　が、己以上ではあるまいな

サム　アノ、それは

此時ベンボリオ（モンテーグ家の一族）登場

グレ　（サムに向ひ旁白）「以上」と云ふがよい、アレ〳〵向ふから御前の御一族の、タイバルト樣が、爰に御出なされる

サム　（グレの耳に力を得てアブに向ひ）ほんに貴樣以上ぢや

アブ　虚言ばかり

サム　ナニ、男なら拔て見い——コレ、グレゴリー、汝の例の一打を、まさかの時には忘れまいぞ

と二人斬り合ふ

ベン　コリヤ愚者退いた〳〵　と二人の劍を打落しながら

劍を藏めい、前後の辨別もない奴原

タイバルト（カプレット家の一族）登場

タイバルト　何ぢや、心なき下朧共に立交り、一緒に拔身を振回すとは、コレ、ベン

ボリヲ、死にたくば此方へ向け、相手を致して遣す

ベン　イヤ、拙者は取鎭めやうと致し居る所、其劍をお收めなされ、さらず

は拙者と共に、此下朧共をお引分けなされ

タイ　何、拔劍しながら取鎭めやうなどゝ、拙者は左樣な詞が大嫌ひ、地獄

と、モンテーグの一族、そして其許が大嫌ひなと同樣に、そりや臆病者、

一本參るぞ

と二人相戰ふ中、兩家の者共大勢來合せ、一緒になりて戰ふ處へ、市民

警官等大勢棍棒を携へ出來る

警官甲　突棒、刺股、袖搦有合ふもので打のめせ、カプレット家の者共打ちの

めせ、モンテーグの一黨打殺せ

老カプレット　綾衣姿にて夫人と共に登場

カプレット　此騷ぎは何事ぢや、拙者が陳刀を早や持てい、ホー

夫人　陳刀などを御取寄せなされますより、寧そ杖でも御取寄なされま

せ

カプ　陳刀を持てと申すに、アレ見よ、老モンテーグも出來り、此拙者に挑

み顏に、一刀を振廻し居るわ

老モンテーグ、同夫人登場

モンテーグ　ヤイ、カプレソトの老滑漢——えゝ留めるな、棄てゝ置け

モン夫人　求めて斬込まうなどゝ、一歩もお放し申すことではムりませぬ

エスカラス公、及び供揃大勢登場

公　騒々しい臣民共、平和の敵、同胞の血に刀の汚れを厭はぬ奴原――コレ聞えぬか、ヤア〳〵人々、忌はしき憤怒の焔を、脉管より迸出る、紫の泉もて消し留めむずる獣原、其の腥き手中より、忌々しの刃物を地に抛ち、怒れる主の詞を聞け、汝老カプレット幷にモンテーグの兩人が、取留もなき口論より、從來既に忘れもせず、三度闘爭を惹起し、三度我が市街を騒がせ、エロナの市の老人共に、老の友なる杖を棄て、大平の錆に閉ぢられて、半ば朽ちたる古長刀を、同じやうに老朽ちし手に取上て、汝等が忌はしき宿怨の爭を、引分けさせしを忘れしか、汝等此上二度と再び、我市街を騒がせなば、治安妨害の罪科は、命を以て購はさせむ、先づ此度は一同此儘退散致せ、カプレット、汝は拙者と共に來るがよい、さてモンテーグ、汝は此儀に就き、追ての處分を伺ひかたがた、今日午後評定所迄出頭せられよ、改めて申渡す、一同早や退散せよ、此旨背くに於ては命はないぞ

とモンテーグ、同夫人、ベンボリオを除くの外一同退場

モン　此古い確執を又荒立てたは何者ぢや、コレ、喧嘩の始まつた時、汝は居合せたかどうぢや、

ベン　某が參り合せぬ前から、貴下の御家來と先方の家來と、既に搦闘致して居りました故、某は取抑へむと致し居りしに、間もなく性急者のタイバルトが飛んで參り、惡口罵詈を唖きながら、用意の一刀を頭の上に振りかざし、滅多やたらに風を斬れば、風はしう〳〵とさも嘲り

顔なるを、此方も太刀拔合せ、打ちつ衝きつなし居る中、後から〳〵と馳加り、此方に一組彼方に一組と戰ふ處へ、公の御出ありて、雙方を引分けなされたのでムります

夫人　それにつけても、あのロメオは何處に居ることやら、今日彼を御見懸はなさらぬか、ほんに彼が、此爭鬪に加はらなんだは勿怪の幸

ベン　彼の東天の金門より、日輪王の覗かせ給ひし一時前、心氣の鬱するゝまゝ、某は外を散歩致しましたに、市街の西盡頭なる楓林の下を、ロメオ殿には其時既に散歩なされてゞムりました、某も其方へ足を進めましたがロメオ殿は早くも某を見付け、森の茂みへ隱れた樣子、然るに某が其時の氣分は、自分一人がうるさい位で、人の居ない見付らない處が何より望ましく思はれました故、ロメオ殿も定めてさうであらうと、我が心より推察致し、御後を追はずに、氣の向いた方へ參り、それて某を外した人を、某も快く外しましてムります

モン　げに幾朝も〳〵、涙は露に振加り、吐息は雲に雲を添へつゝ、彼の邊を彷徨ふを、見懸けた者があるとの事、乍去彼の朗かなる朝日子が、横雲の彼方なる、アウロラ(曉の女神)の寢所より、小暗き帷帳を揭げ初むれば、悄然顔の悴奴は、光明を厭うて歸來り、たつた一人で自分の室に閉籠り、窓の戸をさへひたと鎖し、心地好の光線をわざと入れず、我から世を夜となすは、何ぞ原因あつて氣分勝れぬと思はるゝが、何うぞ善い工夫もがな、其原因を取除かずば、不祥な事でも起りはせぬか

ベン　伯父上樣、貴下は其原因を御存じでムりますか

モン　イヤ我は知らぬ、問糺しても一向分らぬ

ベン　貴下は何ぞ方を設けて御糺問なされましたか

モン　自分でも、又友人などに頼んでも糺して見たが、自己の意中は一切他人に打明けず、秘し隠しに隠し居れば、測量も發見も及びもない事、花の苦が、その花瓣の芳香を、空中に散亂し、又はその濃艶の美を日光に捧る前に、虫に喰はれていぢけたやうに、固く閉ぢてあるうたてさ、ほんに彼が憂鬱の種は何處から出しか、それが分れば喜んで、知る限りの療治は致して遣さうに

ロメオ登場

ベン　モシ其處へ御出なされました、どうぞ一寸彼方へお外し下さりませ、手酷く彈ねつけられる迄も、某が一つ御憂鬱の原因を、聞出して試たうムります、

モン　どうぞ汝の力で、首尾よく眞實を、白狀させるやうにしたいものぢや、そんなら夫人、彼方へ參らうではないか

モンテーグ、同夫人退場

ベン　お早うムる、從弟の君

ロメオ　ナニお早う、まだ午前でムるか

ベン　只た今九時が打た處で

ロメオ　あゝ、悲しいと時は長い、今急いで此處から出て行つたは、慈父でムりましたか

ベン　左樣で、如何なる悲い事があつて、ロメオ殿卿は時が長うムるな

ロメオ　それを得さへ致せば、時の短うなるものを得られぬ故

ベン　若しや戀に見込まれでも

ロメ　イヤ、見離され——

ベン　アノ、戀に見離され

ロメ　戀に見込まれたが、戀ふる女に見離され

ベン　嗟、見かけは、さばかり優しげの戀の神に、左程殘忍暴虐の行爲あらむとは

ロメ　あはれ、永久に覆面の戀の神は、眼盲ながらも射る矢は過たず、戀人の胸に立つぞとは、さて何處ぞて食事を致さうてはムらぬか、おゝ、淺ましや、爰にて今大爭鬪がありしとの事、乍去委細は既に聞入れたれば、それ承らうてはムらぬ、兩家の間に蟠る、恨み憎み故の此騷動、されどそれよりも更に大なる、愛戀の情も存ずるを（これはロメオが戀ふるロザリンはカプレット家の一族なる故此間ある也）あなおぞまし、惡む戀、戀ふる憎惡、おゝ無から出た有、虛から出た實、おゝ沈み勝なる浮氣心、嚴肅なる虛榮心、おゝ秩序ある混沌、重き羽毛、明るき煤煙、冷たき火、病ましき健康、さては覺めたる睡眠など、爾あるべくしてあらぬ物、あゝかゝる戀をこそ此身は感ずれ、それにて戀らしき感は少しもあらねど、ハテ卿はお笑ひなさるか

ベン　イヤ、某は却て泣きまする

ロメ　親しき友よ、それはまた何故に

ベン　卿が優しき胸の苦勞故

ロメ　ハテ、これも皆戀神の惡戲、某が胸に横はる憂愁は、自分のだけで十分なるに、卿がかなしみ迄を添へられては、苦痛は却て增すばかり、げに卿がか程迄、某を愛し給はるは嬉しけれど、それは却て有餘る、某が心のかなしみを增すばかり、戀と申すは溜息の瓦斯でくすぼる烟、拂

へば戀する者の眼中に焔と燃え、制壓へれば涙の川の注ぐ海となる、戀こそは外でもない、こよなう制へ難き狂氣で、或時は咽喉を窒塞す程に苦く、又或時は死人をも蘇生らす程に甘い物ぢや、左らば、ぞ從兄殿

ベン　ママお待ちやれ、某も御一緒に參らう、若し打捨て御出なさらば、それは御恨でムる

ロメ　イヤ、某ば自分で自分をさへ打捨て仕舞ました、某は爰には居らぬ、此はロメオではムらぬ、彼は何處ぞ別の處に居る筈ぢや

ベン　して卿の戀せらるゝ婦人と申すは誰でムるか、何卒しんみりと御話し下され

ロメ　それは病人に、しんみりと遺言を致せと申すやうなもの、死かゝつて居る者に、さう迫るは酷い〳〵、乍去實の處某は、或婦人に戀着致した

ベン　されば こそ某は、戀故ぢやと推察致したが、狙ひは大方當りました な

ロメ　實に狙撃の名人〳〵、して某の戀る女は美しうムるぞ

ベン　美しい的は、尤も容易く當るものでムる

ロメ　イヤその狙ひは外れました、其の婦人には戀神の矢も當りませぬ、彼女はダイアナ女神（月の神にて貞節を司る）の心を有ち、貞節の鎧に身を固め、戀童子がかよわき弓などには、少しの傷をも被りませぬ、甘言をもて攻め寄せても寄せ付ず、鋭き流眄の攻撃をも外して仕舞ひ、さては聖者も迷ふ貨幣をさへ、袂を閉て受付ませぬ、おゝ貨幣といへば彼の婦人は、

美といふ寶には富みながら、あれては身一度死せば、其寶も共に滅び、子孫に傳ふることも出來まいが、それだけは貧者も同然

ベン　然らば其婦人は、一生獨居といふ誓でも立てられましたか

ロメ　いかにも其通り、それ故美の寶を左樣に吝みながら、却て大浪費を致して居ります、その譯は、美一度貞操と共に滅び去れば、種子を後世に遺すこともムらぬ故、また彼女いかに美しとも、いかに貞節高しとも、某を失望の淵に追遣りて、それで天福を享ることも出來ますまい、あゝ戀せじと立てし誓、其誓故某は、かく生存へて今始終を御話し申せど、生きながら死せしも同然の身と相成ました

ベン　某の忠言をお聞きあれ、先づ其婦人は思切りなされい

ロメ　おゝどうぞ思切る方を敎て下され

ベン　それは卿の眼に、自由の眺めを御許しなされ、イヤサ他の婦人を御覽なされと申す事

ロメ　それこそ却て、彼女が美しさを想起さしむる原因でムらう、美しい婦人達が、假面を着けたのを一見致せば、其黑い醜い假面の下に、白い美しい顏があることを思ふもの、盲目に成たればとて、昔は物を見る能力てふ、たのしき寶を有せしことを忘れ得べきか、もし某がこよなう美しき婦人を見たとても、其婦人の美しさは、たゞ某をして、其こよなう美しき婦人よりも、更に優れて美しき、彼の婦人を想起さしむる便となるばかり、さらばでムる、某に忘れる方を御敎へ下さらうとは出來ぬ相談

ベン　イヤ某は之をお敎へ申さずには置きませぬ、若出來ずば、果さぬ義

務の償務を、拂はずに死ぬると申すもの

と二人退場

第二場　同上　街上

カプレット、パリス及び僕一人登場

カプレット　乍去モンテーグとても、拙者同樣等しき條件の下に、此後は爭鬪を惹起さぬとの誓を立て申した、また我々如き老人に取ては、平和を破らぬと申すことは左程六かしい事でもないわさ

パリス　御兩所とも名望高き方々で居らせらるゝに、かく永らく不和で御過ごしなさるとは、げに悲むべき事でムる、それはさて置き、老臺、某の御願に對して御返事は何とでムりますな

カプ　前にも申せし事を反覆す迄でムるが、イヤ、モウ彼娘はまだ世間知らずで、漸う十四歳になつた斗り、せめてあと二夏程も過ぎたならば少しは熟成りて花嫁の資格も出來るでムらうが

パリ　御令嬢より若くても、立派な母親になつた者もムります

カプ　ではあれど早く母になる娘は、まだきに傷はれて色移らふるものでムる、此地上に彼娘を除いては、最早何希望もなき拙者、彼娘は拙者が唯一の希望を繋ぐ跡取娘でムる、乍去パリス殿、娘に當て見て、彼が心を動かして御覽なされ、彼女が承諾致した上は、拙者の考などは如何やうにも相成り申す、彼女が氣に入るとあらば、彼女が自由の婿選みに、拙者は同意承認を吝みは致さぬ、それはさておき、今夜拙者は常例の夜會を催し、氣の合うた人々を招待致しますが、數の賓人の中で

も、貴殿の御光來は益す光彩を添ると申すもので、尤も嬉しく存じ申す、されば拙宅にて、今宵地上の星共が(美人等)開天をまで輝かす、美しの樣を御覽なされ、たとへば紅綠を裝へる四月の月が、滄浪出て行く冬の後から、出來る姿をちらと見て、青年の男女が感ずるやうな、左樣な歡樂を、集ひ來る蕾の花の、乙女子の中にて御取りなさることが出來るでムらう、其乙女子共を悉く、能く見能く聞き、さて其中にて尤も優れたるを御好きなされ、其尤物を見れば見る程、其外の乙女子共は(拙者が娘なども其中で)數の中でこそあれ、才貌に於ては數ならぬと申すやうなをお選りなされ、ささ、先づ御一緒に參らうではムらぬか

——(僕に向ひ、コレ、其方はエロナの市を驅け廻り、こゝに(書付なし)書いてある姓名の方々を尋ね當て、今夜御來駕を御待ち申す旨申して

とカプレット及バリス退場

僕　參れ

茲に書いてある姓名の人々を尋ね當てい、コウッと靴師は尺度を、裁縫師は足型を、漁師は書筆を、書師は網籠を弄びなどゝ書いてある、イヤ待てよ、乍去己は茲に書てある姓名の人々を尋ねよと命つたのぢやぢやが茲には何んな姓名が書いてあるか、己には少しも解らぬわい、これは先づ字の讀める人を尋ねて聞かにやァならぬ、やァこれは丁度よい處へ

ベンボリオ、ロメオ登場

ベンボリオ　ハテサ、火は火を消し、痛みは痛みで減るものぢや、目が廻つたら逆に廻れば癒るもの、新しい悲みは舊い嘆きを治すものでムる、されば

こそ卿の眼に、他の美人といふ病毒を新たに御取りなされ、さすれば
舊い病毒は亡くなつて仕舞ませう

ロメオ　車前草の葉が、それには尤も妙てムらう

ベン　それは何病に妙だと仰せらるゝ

ロメ　脛を挫いたのには

ベン　ロメオ殿、卿は狂氣ばし致されたか

ロメ　狂氣は致さぬが、狂人よりも一層嚴しく縛られてムる、檻に入れら
れ、食物は當てがはれず、鞭たれ、なぶられて――イヤ左らばでムるべ
ンボリオ殿

僕　今日は、物を御尋ね致しますが、貴殿方は、アノ讀む方は如何てムり
ますな

ロメ　ナニ讀む、げに不仕合な今の身の上に、行先の運命も讀まるゝと申
すもの

僕　字は讀めずとも、それならば誰にも讀まれませう、作法、モシ、茲に何
が書いてあるか、お讀めなされますか

ロメ　拙者に其文字と國語が分りさへ致せば

僕　ほんに貴君は正直に仰有て下さりました、左樣ならば

ロメ　待てコレ、讀んで遣るは

と僕の持つ書付を讀む

マルチノ殿幷に同夫人令孃達、アンセルム伯幷に美しき令妹達、ビト
ルピオ未亡人プラセンチヲ殿幷に可憐の令姪達、メルクチヲ殿同令
弟ワレンチン殿、我伯父カプレット殿幷に伯母夫人と從姉妹達、我い

としの姪ロザリン嬢、リビア嬢、ワレンチノ殿、幷に從弟タイバルト殿、ルシオ殿幷に愛らしのヘレナ嬢

僕　何れも美しい者揃ぢや、これが何處へ參られるのぢや

僕　アノそれは——

ロメ　何處へぢや、晩餐の招待か

僕　我等の宅へでムります

ロメ　誰人の宅ぢやな

僕　主人の宅で

ロメ　實にそれを初めに聞くべきであつた

僕　イヤ御問ひなさらずとも、御話申しませう、主人は誰あらう、全盛の大カプレット殿でムります、貴方もモンテーグの御一家でさへない

ならば、何卒御出なされて一盞聞こし召されませ、左樣ならば　と僕退場

ベン　此カプレット家の常例の宴席には、貴殿のお慕ひなさる、いとしのロザリン殿も、此エロナの市の、あらゆる評判の美人達と、共に列席あらるゝ筈、就ては貴殿も彼處へ御忍びなされ、公平な御眼で、ロザリン嬢の顏を、某が御敬へ申す、或美人の顏と御比べなされませ、貴殿は屹度御愛戀の白鳥を、鴉に過ぎぬと思直しなされませう

ロメ　彼女といふ偶像を、崇拜なせる我眼の宗敬が、左樣な不信の行爲（彼女を他と比較して鴉に過ぎざりしと見る如き）を致さうなら、我涙よ火ともなれ、さてこれ迄は溺らすばかり、殺すことはえうせざりし、此兩の鏡のやうな異敬者を（兩眼のこと）不逞の徒として燒き滅せ、我が戀人よりも更に美しき乙女子と

や、イヤ〳〵世界有て以來、古今を照す太陽も、彼女が如き美女を見しは是が最初

ベン　コレサ貴殿は、他に比べる女のない時、右の眼にも左の眼にも、彼嬢のみを映させて、さて美しと見たのでムらう、去りながら、其の鋭のやうな衝器（眼を指して云ふ）の右左に、貴殿が戀慕の其の婦人と、今宵の宴席にて某が御見せ申す乙女とを、並べて御量りなさるがよい、さすれば乾度、今第一と見ゆる美人も、あはれな者に見ゆるは請合

ロメ　左樣なものは見度うもムらぬが、彼の乙女が美しの姿を眺めて慰まう爲めに、兎も角も御供を致すでムらう

と二人退場

第三場　同　カプレット家の一室

カプレット夫人及乳母登場

夫人　コレ乳母、娘は何處にぢや、ちやつとこゝへ呼んでたもれ

乳母　御出遊ばずやうに、只今眞實さう申して參りました、――モシお嬢樣、お姫樣――コリヤ何うぞ遊ばしたのでは――彼の御嬢は何處にお出遊ばします――もーし、ヂユリエット樣

ヂユリエット登場

ヂユリエット　何事ぢや、御用とは何誰ぢや

乳母　御母樣でムります

ヂユリ　おゝ母樣、參りましてムります、御用と仰有るは

夫人　用と申すはかうぢや――アノ乳母、其方は島渡彼方へ、ちと内密の話ぢや程に――イヤ乳母、矢ッ張りこゝに居てたもれ、考へて見れば、却て其方にも聞いて貰ひたい、外でもないが、其方も承知の通り、娘ももう年頃ぢや

乳母　お嬢様の御齡ならば、此妾が幾年と幾月と幾日になるといふまで存じて居ります

夫人　まだ満十四にはならぬわいの

乳母　たつた四枚しかない妾の歯を、十四賭けても申しますが、ほんにまだ満お十四にはなりませぬ、八朔には後幾日ムりませうな

夫人　二週間と少し斗りぢや

乳母　幾日であらうと、何でもかでも、次の八朔の晩には、丁度お十四にお

なり遊ばします、スーサン（乳母の亡兒）が――南無幽靈頓生菩提――お嬢様とお同一齡でムりました、其スーサンハ今は天國でムります、彼の兒は妾風情には過者でムりました――これはしたり妾とした事が、ほんに八朔の晩にはお十四になり遊ばします、間違なくおなり遊ばします、妾はよう記臆て居ります、アノ大地震はもう十一年前でムりましたな、忘れも致しませぬ、其の日、其大地震の日に、乳をお離し申しました、ほんに妾は、アノ鳩小屋の壁の下で日向ぼこりを致しながら、乳首に苦粉（乳を離す時乳首へ塗る苦き粉末）を塗て居りましたに、御前様と奥様とは、其時マンチュアへ御旅行中でムりました――よう記臆て居りませうな――おゝお嬢様が乳首をお銜へなされて、苦粉をお嘗めなされた時の其光景、ぢれてそばへて、乳房にむづかるお愛らしさ、其時丁度が

ら〳〵と鳴る地震、どうやら乳母の役目ももう濟んだ、用はない出て行けと、誰云はねど云はするやうな、心持が致しました、其時から丁度最早十一年、ほんに彼の時はもうお獨りでお立ちなされました、イヤそれどころか、ちよろ〳〵と駈け廻りなどもなされました、遂其前の日にも、倒れてお顏をお打ちなされました、其時良人が――南無阿彌陀佛、彼はほんに氣輕者でムりましたよ――お嬢樣を抱起して「お嬢樣貴孃は俯向にお轉びなされますか、今にお智惠が御付きなされますと、仰向にお轉びなさるやうにおなり遊ばします、左樣でムりませうな、姫樣」と申上ますと、夫人樣、ひたりとお泣きやみ遊ばして「唯々」と仰有りました、どんなおかしい諧謔が始まるかとおもひ遊ばして、ほんにこればかりは千年生き延ても、忘れることてはムりませぬ、「左樣でムりませうな、姫樣」と申上ますとお泣き止み遊ばして「唯々」

夫人　もうそれで澤山、何卒止してたもれ

乳母　畏まりました夫人、ではムりますが、どうも笑はずには居られませぬ、お泣き止み遊ばして「唯々」と仰せられた事を想ひ出しますと、ほんにお額の上には團子の樣な瘤が出てお在なされましたが、危い事危い事、それていぢらしうお泣きなされたを、良人が「貴孃は俯向にお轉びなされますか、今にお年頃におなり遊ばすと、後へお轉びなされませう、左樣でムりませうな、姫樣」と申しますと、お泣き止み遊ばして「唯々」

ヂュリ　そして其方も、もう其話を止めてたもれい喃、乳母

乳母　唯々これでもうお仕舞てムります、此上はたゞ〳〵神のお慈悲て、

貴嬢の御身の、御繁昌を祈るばかりでムります、ほんに貴嬢は妾がお育て申した中で、一番可愛らしいお兒でムりました、貴嬢が此後お嫁入なさるのを、拜見致すことが出來ましたら、此上の望はムりませぬ

夫人　おゝそれ、その嫁入の事を、妾は話に來たのぢやぞや、コレ、ヂユリエット、其方はお嫁にならうといふ氣はないかや、どうぢや

ヂユリ　結構な事ではムりますが、まだ夢にも其樣な事などは

乳母　結構な事、ほんにお悧口なお嬢ぢや、乳母の口からこんな事は申上られませぬが、貴嬢はお智慧を、乳と一緒にお吸取なされましたのでムりませう

夫人　よう考へて見や、其方より齡下でも、此エロナの市の貴婦人方の中には、疾うに兒まで產んだが、一人ならずあるわいの、想へば此の母も、其方が今處女で居る、其年頃では最早子持になりしぞや、手短かに申せばマアかうぢや、あのパリス殿が、其方を花嫁御にとの所望ぢやぞや

乳母　其御方ならばお嬢樣、世界の女子が――おゝそれ、お雛樣のやうな殿御でムりますな

夫人　エロナといふ此廣い花園にも、彼の樣な花は又とあるまい

乳母　ほんに彼の御方は花でムります、眞の花でムります

夫人　其方はどう考へてぢや、彼のお方をいとしいとは思はぬか、今夜は家の宴會にお光來の筈、パリス殿の御顏といふ書物の中に、美の筆で書いてある、いとしらしさを讀んで見や、釣合のよい目鼻立が、それぞれに映り合うて、見る眼を樂ます美しさ、又此美しい書物の中に、意味

の通はぬ所は、眼の縁の鼈頭を探して見や、ほんに此の貴い愛の書物に、何不足はなけれども、女房といふ、表紙の締括のないが一つの疵、魚は水に包まれて全しとやら、表面の美しいものは、美しい在中物を包むが身の譽れ、金表紙に金玉の文字を包む珍書こそ、世の尊崇を受くべきなれ、其方故にパリス殿が受る譽れは、取も直さず其方の譽れ、其方の肩身も狭うはなるまい

乳母　狭うはならぬどころではムりませぬ、廣くなるのてムります、女は男故に肩身が廣うなるものでムります

夫人　何はさて措き、其方はパリス殿を好くか何うぢや

ヂュリ　好くやうに見て試ませうわいな、見た斗りで好くやうになるならば、とはいへ、母様の御指圖の許すだけて、それより餘計に此眼を使ふことは致しませぬぞへ

僕一人登場

僕　夫人様、お客はお揃てムります、お膳も出ました、夫人はお前がお召になります、お嬢様も御尋ねなさります、お乳母どんは、臺所の衆が、手傳をせぬとて、惡口云うてゞムります、そして何から何まで大混雜てムります、私は是からお給仕に出ますところ、何卒早速御出下さりませ

夫人　今後から直ぐ行くわいの（と僕退場）――ヂュリエット、伯爵が嘸お待兼てあらうわいな

乳母　さア〳〵お出て遊ばせ、そして今の樂しい月日に、將來は樂しい夜をお添へなされませ

と一同退場

完

第四場　仝　街上

ロメオ、メルクチオ、ベンボリオ、及び五六名の假裝者、蠟燭持、其他數人登場（ロメオは巡禮者に假裝せり）

ロメオ　何と、辯解に此文句を饒舌りませうか、それとも默て這入りませうか（假裝舞踏會には、招かれざる者も、往々押懸行く風習あり、此の場合には、押懸客は入口にて、何等かの趣向をなして辯解の辭をなすなり、ロメオ等も今夜押懸客に行くこと故、今途上にてそれにつきかにかく話し合ふと知るべし）

ベンボリオ　イヤ、今時箇樣な辯解をするなどは陳腐〳〵、目隱をした戀童子が、韃靼形の彩色た細弓で、案山子が鳥を追ふ樣な風躰に、女子共を追立てながら這入るなどは致さぬ我等、（これ等は押懸客が入込む時慣用の趣向と見ゆ）切拔書なしに黑ン坊に從て、覺束なげに口上を讀むなども致されまい、我等は

只だ默て通つて、接待係に好きな判斷をさせて置き、勝手に躍つて、そして、歸るまでの事

ロメ　某には其蠟燭を持たせて給はれ、こんな陽氣な戲れは、某には向きませぬ、某の胸は眞の闇、ぢやに依て蠟燭持が宜しうムる（假裝者は必ず蠟燭持を携ふる習慣なり）

メルクチオ　イヤ、ロメオ殿、貴殿に躍らせいでよいものか

ロメ　某にはそれがどうも、お聽下され、貴殿方は輕い底の附いた、躍り履をお履きなされてゝムるが、某が精神の底には、鉛の板が着て居て、地に吸着て動けませぬ

ナル　さらば貴殿は戀する人、戀童子が翼を借て、お飛びなされい

ロメ　イヤ某が受けし矢は、餘りに深く立てムれば、彼が輕い翼も物の用

には立ちませぬ、苦痛といふ境をば、少しも飛出ることの、出來ぬやうに射つけられてムる、ほんに戀の重荷に壓付けられて沈むばかり

メル　貴殿が其身躰て沈まれたなら、それこそ戀童子は重荷を背負はせられた者てムる、彼のやうな纖弱い者には過ぎた重荷

ロメ　戀童子が纖弱い者と思召すか、イヤ〳〵彼は暴い酷い騷がしい者て、又荆の如く人を刺す者てムる

メル　若し戀童子が貴殿に對して、暴々しい、擧動を致すならば、貴殿も彼に對して暴々しくなさるが宜しい、先方で刺したら此方でも刺しに刺して、閉口さして了うが宜い――コレ顏隱しの假面を此方へ（と假面者の手より取る）――イヤ假面のやうな此顏へ、又假面を蒙つても、ハテ、顏の棚下しをされた所てそれが何ぢや（と又假面者に遮す）たゞ耻かしがるは此

出額斗り

ベン　サア爰ぢや、案内こんて御入りなされ、這入るが否や一同遮二無二躍り込め

ロメ　某には蠟燭を持たせて下され、心樂しく氣の輕い御方は、踊て無心の藺草をおくすぐりなされい（舞踏をなす時踊をすりつくるる故○間遮は舞踏場に敷くもの）某は、彼の古い諺に、蠟燭持は結句樂しい遊びをすると申します故、蠟燭持て見物致さう、一躰此遊びは某に向きませぬ故、某は先づ止めませう

メル　警吏の詞ではないが、コラ默りめされ、靜かになされ、止めませうもないものぢや、かうして居るは、畫燭蠟を燃やすといふものてムる（畫燭を燃すは時間を徒費すること）

ロメ　イヤ左樣てはムらぬ

メル　某の申したは、かう遲引致すは無益に燈火を費すもの、蠟燭を燃す如きものぢやとの意味でムる、何でも詞は善い意に取るべきでムる、智慮で推して細かい詮義を致すよりは、あつさりと從順に取るがようムる

ロメ　いかにも今夜舞蹈に參るは好い意、乍去知慮ある者のなすべき擧動とは申されぬ

メル　其譯を承りませう

ロメ　某昨夜夢を見ましたが

メル　某も見ましてムる

ロメ　して、貴殿の夢は如何なる夢で

メル　夢見る人は、往々横着な出鱈目を申すといふ事を夢みました

ロメ　いかにも寢所の中に横臥して、まさ〳〵しき事柄を夢むる者でムれば、横着とも申されませう

メル　おゝ然らば貴殿は、魔姫マブにお咒かれなされたな、件の魔姫は、數の妖精の產婆で、其來るや市役人の食指の上の、指環の瑪瑙の彫刻よりも小さい躰軀で、眠れる者の鼻の上を、原子の馬車に乘て横ぎるとか、其馬車の輻は、長い蜘蛛の脚で作り、被覆は蝗虫の翼で張り、靭は小蜘蛛の絲、襟圈は水の樣な月の光線、鞭は蟋蟀の骨、鞭絲は豆の薄皮、御者は鼠色服の小蜉蝣で、怠惰な婢女の指先から堀出される、小さい丸い虫の半ば程もない、躰軀（怠惰なる婢女の指先には小さき丸き虫ありて住むと想像せらる、怠惰なる婢女は屢ば此虫を堀出すといふ）さて又車躰は、榛の實の殼を、太古よりの妖精の製車工、栗鼠や地虫の穿ち作りしもの、さて此の儀式立つたる裝飾で、毎夜さ魔姫は

出遊し、戀する人の腦中を疾驅すれば、忽ち戀の夢となり、大宮人の膝を過れば、忽ち虛儀虛禮の夢を見せ、狀師の指を過れば、忽ち謝金の夢となり、婦人の唇に觸るれば、忽ち接吻の夢を見す、其時婦人の唇に香菓（氣息を芳んばしくする爲めに婦人の食ふ菓子）の臭氣ある時は、魔姫怒りて其唇に腫物を發せしむることありとか、時に官人の鼻の上を走らすれば、忽ち好き地位を嗅ぎ出したる夢を見せ、時に年貢の豚（檀家より牧師に年貢の代りに豚を納る習慣あり）の尾を携來て、眠れる牧師の鼻を擽れば、寺領の殖る夢となる、又時として軍人の頸を過れば、外敵の頸を刎る夢となり、忽ち攻城、忽ち伏兵、忽ち百煉の刀を夢み、又忽ち底拔に呑む祝杯の夢を見ろと思へば又忽ちにして、耳に軍鼓の音を聞き、眼を開いて起ち上り、驚き顏に祈る聲咀ふ聲、さて又元の如くに眠入る、彼の夜間、馬の鬣をくゝらかせ、又

は不潔に身を持つ者の、汚れ頭髮を焦げつかせ、若し解けふぐれた其時には、却て不祥の兆となるてふ、かゝる惡戲を爲すも皆此魔女でムる、さては處女子が仰向に眠れる時、上から押付て、初めて支へ方耐え方を敎へ込み、忍耐强き、從順しい女子となすも、彼が所業でムる、ハテ是が即ち魔姫マブで——

ロメ　お止しなされメルクチオ殿、取留もない事をお饒舌りなさる

メル　實に〳〵、某は夢の物語を致すのでムる、然るに夢と申すものは、締りのない頭腦の兒で、取留もない空想に、外ならぬものから生るゝものの、その空想と申すも、大氣のやうに希薄い實質で、風のやうに行衛も定かならぬもの、御覽あれその風は、今北國の冷たい胸を戀ひ慕ひ、かにかくと云寄れども、今に怒り狂ひて、躍り出し、露滴るゝ南の空に、顏

を向るやうに成りませう

ベン　・貴殿の仰せらるゝ、其物語の風に吹きまくられ、我を忘れて居りましたが、最早晩餐も終り、ともすれば時刻遲れに成ませう

ロメ　某は却て早過るやうな氣が致す、某の心は何とやら、今夜の宴會を以て、從來運の星が藏ひ置きし、身の上の一大事が運り初め、不時の死てふ科料もて、おもしろからぬ此身の存在を、終らむとするにはあらずや、とやうの疑念が致します、さりながら何事も、某が浮世の航海を導く上帝に、任せ置くより他に詮方もムらぬ、さらば參らう、各方

ベン　イザ大鼓を打てい（此假粧者の行列には大鼓も從ひ行きましものと知るべし）

と一同退場

第五場　同　カプレット家の客室（饗應濟みて舞踏に取掛らむとする体）

樂人共控へ居る――給仕二三布巾を持ち登場、狼藉たる杯盤を片付ける

給仕甲　あのポットパンは何處にぢや、片付の手傳ひも致さぬとは、あれで給仕とは押の強い

給仕乙　何から何迄、一二人の手に落ちては、手を洗ふ暇もない、忌まはしい事ぢやぞ

給甲　盤倚子を彼方へやつて、碗碟架を形付て、碟小鉢を用心せい、何卒其菓子を一切、取て置て呉りやれ、そして、己を可哀想と思ふなら、使番丁に、スーサン、グリンドストンとチルの兩姐を遣させて呉りや、アント

ニー男、ポトバン引

給丙　おい、こゝに居るわ

給甲　其方は廣室で御用があると、捜して、呼んで、尋ねて騒いでてぢや

給丁　イヤ一時に其方の用も此方の用も足す事は出來ぬわい――マア働けさ、皆の衆、暫時の辛抱ぢや、働け〳〵、長生する者に利益ありぢや、終極まで働いた者に德はつくわさ　と皆々退場

カプレット、ヂユリエット並に家族を引連れ出來り、來客假裝者一同に挨拶する

カプ　ようこそ御來駕下された方々、苟にも爪先に鷄眼の出來てない御婦人方は、（婦人は足を小さく見する爲め、小さき靴を穿ち、爲めに爪先にマメを生ずること多し、而してかくマメの出來たるは、婦人に取りては人に知らるゝを厭ふべき事なるは言を俟たず）方々と携へて、お躍りなさるを厭ひはなさるまい、アハアハ、コレサ、貴婦人方、何誰が躍るはお厭だと仰有ります、何でも尻込をなさるお方は、屹度鷄眼が出來て居らせらるゝのでムらう、何うでムる、當らずと雖も遠からずでムらうな、――おゝ貴君方も善うこそ御入來、かく申す拙者も、一度は假面を着て躍の中へ交り、美人の耳元で嬉しがらせなどをさゝやいた事もムつたが、ほんにそれも昔となりました、遠い昔となりました――これは〳〵善うこそ方々――コレ樂人達、さゝ始めい――早やう場處を明けい、はや席を取形付けい、そして令孃達躍つたり〳〵――　と發樂始まる、大勢躍り初むる

コレ〳〵者共、もつと燈火を點けい、そして卓子共を隅々へ疊み付け、暖爐の火を消すがよい、少々室が暑過る――あゝ、これは思かけぬ程

のおもしろさ――マヅ〳〵お坐りなされカプレット老人（これは同族の一老人、多分前の招待表に見えたる叔父カプレットを指すならむ）お互に舞蹈る時代は通り越した我々、想へば御同様、最後に舞蹈てから何年に相成りませうな

叔カプレット　左様、三十年にも

カプ　何と仰有ります、イヤ、それ程には成りませぬ、それ程には、次のペンテコストの祭日迄で、ルセンチオの結婚後、多分二十五年程に相成りますが、其婚禮の日に、御同様假裝舞蹈を致しました

叔カプ　イヤ、もつと多い〳〵、彼が悴の齡が既にそれよりも多うムる、最早三十に相成らう

カプ　御冗談ばかり、彼が悴は二年以前、まだ後見人附の小悴でムつた

ロメオ　アノ向ふの男爵と手を携へて居る令孃（ヂユリエツトを指す）は、いかなる御

方ぢやな

僕　私は存じませぬ

ロメ　おゝ蠟燭も光を失ふ程輝き渡る美しさ、其美き姿もて、今夜といふ夜の面を飾ること、恰ら黒人の耳に懸れる、寶玉にも譬へつべし、等閑には佩るも惜き美しの玉、此世の物とも思はれず、此かる美人が彼の樣な男と並ぶとは、烏に交る白鳩か、おゝ此舞蹈が終つたなら、姿を見失はぬ樣にして、密と此疎末な手を、彼の玉の樣な手に觸て見やう――さても我が今迄の戀は何なりしぞ、我が心は果して戀をなしたりしか、おゝ我が眼よ否と答へよ、我は實此の今夜迄眞の美人を見ざりしなり

と居合せたる僕に問かける

タイバルト　聲音から察するに、此奴はモンテーグ家の奴に相違ない――コレ

給仕某が劍を持て參れ――ヤイ汝はな我等が神聖なる夜宴を嘲弄致さむ爲め、其滑稽た假面に顔を隠し、此處には忍び來りしな、よし〳〵我が一族の名譽に懸け、彼を斬殺致せばとて、それは罪とは爲すに足るまい

カプ　コレサ、何うしたものぢや、何故左樣にいきまき狂ふぞ

タイ　叔父上、これは怨敵モンテーグの一族でムります、今夜我が宴席を、嘲弄致さむとの惡意より、忍込んだ奴でムります

カプ　ロメオではないか

ハイ　其ロメオ奴でムります

カプ　勘辨してやれ、放して遣れ、靜粛く致居るものを、そして實の所、道德堅固な青年として、エロナ市民の譽者ではないか、拙者は此市中の富

に代ても、我が邸内で彼に侮辱を加へることは致度うないわ、ぢやに由てたゞ勘忍して見ぬ振を致せ、拙者が意中を酌んでたもらば、先づ〳〵善い顔をして、澁面作るは止してたもれ、かやうな席には不似合ぢやわ

タイ　イヤ、かやうな不埒な來客のある時には、却て似合はしうムりませう、某は勘辨が成りませぬ

カプ　イヤ勘辨致させいでは置かぬ、コレ〳〵、其方は何うしたものぢや、拙者が勘辨致すと申すに、拙者は此家の主人でないか、それとも其方が主人か、勘辨して遣れぬと申すか、それこそ來賓中に大騒動を惹起さう、其方は飛んだ人騒せを致すてあらう、ほんに其方は人騒がせを

タイ　ハテ、叔父上、家の恥辱てムる

カプ　止せ〳〵意地ッ張の小悴ではある、これが果して家の恥辱か、左樣な暴行を致したなら、後に悔むことがあるであらうぞ、――其方が獨り拙者にかく抵抗致すとは、イヤ〳〵もう止せ〳〵――これは方々、御尤〳〵――其方はほんに意地ッ張ぢや、靜に致せ、云ふ事を聽かぬ上は――もつと燈火を點けい〳〵――コレ外聞の惡い、靜に致させいては――ハテ諸君、何卒御愉快に

タイ　無理押付の勘辨が、自つと出て來る憤怒の情とぶつかり合ひ、其水火の戰に、某が骨肉は顫きます、此上は某は手を引きます、乍去、今夜蜜のやうな樂みを、味ひ居る押懸客の無禮者、後日苦い目に逢はせて措かうか

（タイ退場、彼方にはロメオ、かゝる叔父甥の間の爭論ありしことも知らず、ヂュリエットの傍へ近寄り）

ロメ（ヂュリエットに向ひ）此疎末な手を、貴嬢の聖い御厨子へ觸れたが冒瀆ならば、及ばずながら、某が唇と申す巡禮共は、貴嬢の御手を接吻して、冒瀆の罪を贖はうと致して居ります（巡禮者は諸方を巡禮して、崇拜する厨子を接吻し、以て己が罪を洗去るの習慣あり此語あり）

ヂュリ　コレハ〳〵、巡禮殿、箇樣に禮儀正しい御手をば、冒瀆などゝ勿躰ない、聖者でさへ巡禮には、手に手を觸れさする習ひもあり、掌と掌を合せるは、行者尊者の接吻ぢやとやら申します

ロメ　そんなら聖者は、唇がないと見えますな、行者や尊者も同じくないと見えまする（唇ならば手や掌にてまだるこき挨拶をもとの意、唇に接吻を迫る所なり）

ヂュリ　イヤ巡禮殿、唇はムりますが、それは祈禱の時に用るのてムります

ロメ　おゝそんなら、コレ聖者殿、手のなす所を、唇にも許させ給へ、某が唇は接吻を祈つて居ります、御許しあれ、さらずば某が信念は、失望に終りませう

ヂユリ　聖者は祈る意を恕しはすれど、容易く動かされはせぬわいな

ロメ　そんなら動かずにぢつとして御在なされ、某は祈願の結果を頂戴致さう（と接吻しながら）これで此の唇から、某の罪は消え失せました

ヂユリ　そんなら妾の唇には、アノ貴郎の唇から、取た罪が着いて居やうに

ロメ　某の唇から取た罪、おゝ嬉しいが飛んだ迷惑、そんなら其罪を又還して下され（又接吻を許せ）

ヂユリ　なんのかのと理屈を付て又接吻

乳母　お嬢様、お母様が貴嬢にお話があるとてお召なされます（これにてヂユリ彼方へ行く）

ロメ（乳母に向ひ）此御方のお母様とは何誰ぢやな

乳母　ハテマア、誰あらうお母様とは、此家の夫人、それは〳〵お悧口な、正しい善い夫人でムります、貴君の今お話なされたお嬢様は、此妾がお乳を上たのでムります、ほんに彼嬢をお貰ひ遊ばす御方は幸福者、澤山な財産さへ着て居ます

ロメ（傍白）おゝそんなら、此女がカプレット家の娘か、おゝ何たる悪因縁我生命は今や怨敵の掌中に握られたと申すもの

ベンボリオ　いざ歸らう、歸宅致さう、今こそ遊戯は面白い盛り、此上長居を致せばとて、これより面白い事はムらぬ

ロメ　某も其様に思ひ申す、居れば居るほど不安を増すばかり

カプレット　イヤ〳〵方々、まだ御歸宅の御仕度には及びませぬ、今心ばかりの夜食を準備致しました――あゝ左樣でムるか、致方がムらぬ、然らば何誰も難有うムりました、眞實難有うムりました、お靜かに――もつと燈火を持てい――おゝ然らば我等も、お開きと致さうか、ほんにこれは大分夜が更けたぞ、拙者は先づやすむと致さう

と一同退場、ヂユリと乳母のみ殘る

ヂユリ　コレ乳母、鳥渡茲へ、彼の向ふへ行く御方は何處の御方ぢや

乳母　あれはチベリオ殿の御子息で、お跡取でムります

ヂユリ　今外へ出やうとして居る御方は

乳母　あれは大方ペトルチオ殿でムりませう

ヂユリ　そんなら後から出て行く、アノ舞踊をなさらなんだ御方は

乳母　妾も存じませぬ

ヂユリ　ちやつと往てお名前を伺て來てたも（と乳母出て行く）――若しや彼のお方が、最早夫人のある御方なら、おゝ此身が婚禮の新室は、やがて此身の墳墓所であらうわいな

乳母（還り來て）彼の御方はロメオと申して、モンテーグ家の一人、貴孃方が御怨敵の一人子息ぢやと申します

ヂユリ　おゝ、そんなら此身の戀は、憎みから出た戀か、知らずに戀ふとは早まつた、知つた今は早や遲蒔、あゝ怨敵を慕ふとは何たる因果な戀ぢやゝら

乳母　何を仰有ります、それは何てムります

ヂユリ　アノこれは、おゝそれ一緒に躍つたお方から、たつた今習うた歌ぢ

やわいな　と内にて「ヂュリエット」と呼ぶ聲する

乳母　はイ〳〵、唯今御出なされます――さア〳〵參りませう〳〵、お客様は皆んなお歸り遊ばしました

と退場幕

第二幕

口上人（コーラス）登場

口上人　古き願望（のぞみ）の幹は枯れ、別に芽をふく新情（あらなさけ）、ヂュリエット姫に比べては、戀うて戀うて死んでもと、思ひ詰めたる美人さへ、今は美人の數ならず、思ひ思はるロメオが戀、互に迷ふ深情（ふかなさけ）、一門の敵を戀ふ男、劍（けん）の餌（え）を拔く危險（あぶなさ）を、女も冒して忍ぶ戀、怨敵の子と目指されては、妹背（いもがせ）通ふ路も絶え、戀の陸奥かわしもならず、我背子が來べき宵ぞと待つことも、なられば思ふばかりにて、逢ふべき便（よすが）もなきものから、燃ゆる情（なさけ）を力草、時經るまゝに知戀も出て、忍び逢ふ夜のおそろし、怖（こ）はし、危ういの刃の双の上で、戀の甘酒飲む思せり

と口上人退場

第一場　ヴロナ　カプレット邸庭園の墻壁に沿うたる小逕

ロメオ登場

ロメ　心は此中に殘れるに、何とて空しく立歸らむ、（と壁を超えむとする樣子なし）藻抜の殼の我が五躰、いざ躍り込みて主を尋ねよ

と墻壁を攀登り內側に躍入る

ベンボリオ、メルクチオ登場

ベンボリオ　ロメオ殿、從兄の君、ロメオ殿

メルクチオ　油斷のならぬ男なれば、これは何でも、密と還て寢て居るに相違ムらぬ

ベン　イヤ〳〵、此逕を走て參り、此庭園の墻を躍り超えました、呼んで御覽なされ、メルクチオ殿

メル　呼びませうとも、術を以て寄せませう（これは魔法使が呪文を唱へて惡魔を寄せ、己が好める勝手の姿形にて出現せしむる習慣に倣ひ、我國の巫女が生靈死靈の口を寄するが如し）——ロメオ殿、浮氣殿、物狂ひ殿、こがれ人、戀する人、いざ〳〵、溜息吐息の形にて顯れ出でよ、たった一言物言ひ給へ、さらばそれにて、貴殿が御無事のあるしと致さう、嗟、悲しやとか、但しは愛とか戀とかたつた一言、又は彼のヱヰナス女神へ獨語、若くは女神が盲目稚兒、彼の小唄のコペチア王が、乞丐娘を、戀うた時、弓矢のたくみを盡したる、キューピッドが異名をだに、責めて一言呼ばはり給へ——ハテ聞えぬと見える、身動きも致さぬ、がさりとも致さぬ、これは塀から飛下て死なれたと見える、愈よ術を以て寄せずばなるまい、いかにロメオ殿、ロザリン孃が涼やかな眼、圓き額、

深紅の唇、纖き足首、華奢な脛、さなやかな股、さては其邊りなる地面に依りて、我は貴殿が死靈を寄するぞよ、はや有の儘の姿にて、我等が前に現れ出てよ

ベン　コレ、若しやロメオ殿が、貴殿の其詞を聞いたなら怒るてムらう

メル　イヤこれで怒る筈はムらぬ、ロザリン嬢が身邊に、妙不思議な惡魔を寄せて、すつくと突立上らせ、彼の嬢にそを降伏せしめ、閉口せしめしならば、それこそ怒りも致さう、腹立たしくもムらう、某が寄せたは正直正當な仕打、たゞ戀人を引合に出して、ロメオ殿を寄せた斗りてムる

ベン　コレサ、ロメオ殿は、此陰濕い夜氣を友と致す爲めに、此森の中へ隱れたのてムらう、戀は盲目と申せば、暗闇が丁度心に適うてムらう

メル　戀は盲目ならば、的を射ることは出來ぬ筈てムるが、イヤ今頃はロメオ殿、栗の木の下に坐り、乙女子共が眺入りて、獨笑むなる笑栗を想出し、戀人の笑み栗を見たいものと思つて居やう、おゝロメオ殿、ほんに彼ロザリンが笑み栗で、卿を桃の實にして欲しいよなう、おさらばぞロメオ殿、此處で木の根枕は、冷たうて眠ることも出來ぬに依て、某は歸宅致して、小布團になりとくるまりませう、イザ、ベン殿歸らうてはムらぬか

ベン　左樣ならば歸ると致さう、わざ〳〵逃げ隱れうと致さるゝ人を、尋ねればとて無益てムる

と退場

第二場　同　カプレット家の庭園

ロメオ片隅の方より進出る

ロメオ　實際には傷かざりし矢痕を見て、樣々の諧謔を並べ立つる（メルクチオは今もロメオがロザリンを戀ふと思込み、それに就き諧謔を云ふ故此語あり、今のロメオが考にてはロザリンに對する戀は實際は傷つかざりし矢痕なりしなり）——

と此時ヂュリエット彼方の階上の窓に現れ出る（但しロメオが眼には姿は未だ見えず、たゞ燈光のみ見ゆる）

コレ靜かに、彼方の窓から光明がさすのは、おゝ彼窓こそ天の東門、中なるヂュリエットは大日輪——さても美しの日輪早やう上りて、嫉妬深い月の光を消してたべ、其月の女神は既や、己が小姓の卿が却て、

己れに優り美しいを、悲む餘り色青ざめ、衰へ果てし見すぼらしさ、此上は彼女神が、小姓役を早や止めよ（月の女神ダイアナは貞節の神にて處女たる間は此女神の配下なり）

嫉妬深き神にてあるを、その貞節臭い青白けた病しげな風采は、恐者ならで誰が倣ねやう、——（と此時ヂュリエットの姿始めて彼が眼に映ずる）ヤ、ヤ、あれこそ我が乙女よ、戀人よ、おゝ、か程迄に我が戀る由を知らせたやな——姿は物云ひだけの風情なれど云ひもせず、眼は何事をか囁やく樣子、よしよし其返答を致さうか——イヤそれは餘り大膽といふもの、其囁きは此身へならず、これは屹度天上の尤も美しい星二つ、道れぬ所用ありて、他行致す、其間、彼女が兩つの眼に留主を頼み、暫し代りて天上に輝きてよとの音信あり、それで問答を致すのであらう、おゝ若し彼の雙眼天に上り、天の星降りて彼女が瞼上に留まらば如何ならむ、彼の美

しい兩瞼の光には、星も顔色を失ひて、白日の燈光も忍ばれう、但し天上の彼女が眼は、大空を照して晝の樣に、雀鴉も囀り騷ぎ、夜明としも思ふてあらう――あゝアレ、片頰を手にもたせかけて、あゝせめて彼の手を覆ふ手袋に此身をなし、彼の頰に觸つて見たや

ヂュリ（かくとも知らず獨語）嘘々

ロメ　物云ひし樣子、おゝ最一度云ひて見よや天つ乙女、卿が今夜の閨を照して、我が頭上に輝く樣は、悠々たる白雲を蹈み、空翔りゆく天使の姿、人をして思はず立停りて空を仰ぎ、驚て渴仰せしむるに似たりと云はうか

ヂュリ（間ほロメオのあるを知らずに獨語）おゝロメオ樣、ロメオ樣、貴郎は何故ロメオ樣でおはすぞへのう、えゝ父御の子ではないと主張り、家の名をもお棄てなされ、それがならずば、せめて妾が戀人ぢやと、誓文立てゝ下さらば、妾の方で、カプレットの家名を棄てやうもの

ロメ（旁白）もつと聞いてからに致さうか、寧そこゝらで名乘らうか

ヂュリ（前の獨語を續けて）敵といふはたゞ貴郎の御姓ばかり、モンテーグといふ姓がないとて、貴郎が貴郎に變化はない、モンテーグが何ぢや、手でもない脚でもない、腕でもない顔でもない、五躰の中の何處ぢやとて、之がモンテーグといふはない、おゝさらば別の御姓をお付けなされ――名といふものが何になる、たとへばあの薔薇といふ物に、別の名を付ければとて、色香に變化はないと同樣、ロメオ樣とて、ロメオといふ御名がないとても、立派な殿御に變化がない筈、――ロメオ樣、おゝ其御名をお棄てなされませ、貴郎のお身に着いたものではなし、そしてそ

の代りに此妾を御取り下さりまし

ロメ　然らば御言葉に甘へ、此身をたゞ愛するとばし仰せられなば、新たに名を命けかへて、以後はロメオを止めませう

ヂュリ　何誰ぢや、暗紛れに身を隠し、人の秘密を立聞くとは、如何なる御方ぢや

ロメ　如何なる者といふことを、名乗るは辛い耻かしい、懐かしの聖者殿、某が名は、自分にさへ厭はしい、と申すは此名こそ、卿が敵であるなれば——此名が、紙にでも書いてあるなら、かき破て棄てやうもの

ヂュリ　さういふ貴郎の御言葉の、まだ百とは承らねど、どうやら御聲に覺えがある、ロメオ様ではムりませぬか、アノ、モンテーグ家の

ロメ　イヤ、ロメオでもモンテーグでもムらぬ、何れも貴嬢のお嫌ひならぢ難う、そして貴郎は貴郎故、若し家族の者でも見附けたなら、それこそ御命にも拘ること

ヂュリ　何うして爰へは、そして何故にお出なされました、園の塀は高く攀

ロメ　此身は戀の輕い翼で、彼の塀を飛越えました、ハテ石の墻でも戀を隔ることは出來まいに、又戀のたくらむ所、戀の成就し得ぬはない道理、なりや卿が家族人とて、此身を妨ることはいかな〳〵

ヂュリ　若し貴郎を見付たなら、殺さずには置かぬ彼等

ロメ　イヤ彼等の打物の、二十三十にも優る危險は、卿の眼の中にあるものを、卿さへ、優しい顏を見せてたもるなら、彼等が敵意などは、何とも思ひ申さぬ此身

ヂュリ　どのやうなことがあらうとも、爰で貴郎を見付させたうはムりま

せぬ

ロメ　人眼の關を隔つる爲めに、夜といふ外套は着て居れど、思ふ人にも思はれずば、寧そ見付けられたが宜い、いとしき卿に愛せらるゝこともなく、徒に生存居らうより、彼等が惜み故に終るが優

ヂュリ　さうして此の妾の室をば、誰にお聞なされました

ロメ　尋ぬて見やうと思ひ立たせた、其戀こそは道志るべ、戀は此身に知慧をかし、此身は戀に眼を貸して――ハテ船頭ではなけれども、若し卿が遠い〳〵、海の彼方の行術も知らぬ處に居られうと、卿といふ獲物故には如何なる嶮も冒さいては

ヂュリ　夜といふ假面に顏を包み――若し此假面がないならば、こんなことを御耳に入れ、乙女の身の、顏から火の出るやうてムりませう、それこそ女の作法を固く守り、こんな事など申すことてはムりませぬが、今は作法も棄てゝ仕舞て申します、貴郎は眞底、妾を愛しう思召下さりますか、おゝ愛しう思ふと仰有りませう、そして其御詞を、夢僞りとは思ひませねど、滅多に誓文などをお立てなさると、却て化となりませう、戀する者の誓文は、破るとも神樣は、笑てお咎めはないとやら、おゝロメオ樣、眞實愛しう思召さば、たゞ飾氣なく有の儘に、愛しいと仰有て下さりませ、若し又此樣に事もなげに、御心に從ふたを、輕々しいと思召すなら、妾は澁面作て意地を張て、いやぢやと云うて、そして貴郎に云寄らせて、操りもしませう、尤もさもない時は、こんな事は嫌ひな妾、とはいへほんに此身は愚者、輕々しい擧動と、御輕蔑も御尤、乍去世の中の賢女顏して、よそ〳〵しさを粧ふ女などより、眞實、心は優れり

とおぼし召せ、實際を申せば妾とて、まだそれと氣付ぬ中、心の中の深き思の獨語を、お聞かせ申したればこそ、さもなくば、かう易々とは靡きもせまい、それ故どうぞ、かう暗まぎれに見つけられ、容易く御心に從うたを、輕々しいたづらと、御さげすみ下されますな

ロメ　イヤ、ヂユリエット殿、あの樹立の頂をば、銀色に色どりなす、アレあの月も照覽あれ——

ヂユリ　おゝ、月を引合に、誓文はおよしなされませ、廻るにつれて、月々に變る、不確實な月のやうに、貴郎の御心が變り易うてはなりませぬ

ロメ　然らば、何神樣を引合に——

ヂユリ　誓文などはなされますな、若しどうでもと仰有るなら、御自身を證にして、お誓ひなされませ、それこそ妾が崇拜の御本尊、信じて疑ふこ

とではムりませぬ

ロメ　乍去某が心中の——

ヂユリ　イヤ矢ッ張りお誓なされますな、貴郎の御光來は、此上なう嬉しうムりますが、今夜茲で御約束致すのを、嬉しいとは思ひませぬ、餘り突然な、そゝッかしい、丁度彼の電光のアレーといふ間に、消失するやうてムりませう、今夜はこれてお別れ申します、此次の御見にこそ、今夜芽ざした戀の莟が、暖かな春の風て、美しい花と咲きませう、左樣ならばお休み遊ばしませ、甘い芳ばしい休息と安神とが、貴郎の御心にも妾の胸へも、どうぞ宿れと祈ります

ロメ　おゝそんなら此まゝ、すげなう某を後に見棄てゝ

ヂユリ　そんなら今夜、どうなさらうと仰有ります

ロメ　心中の誠をば、互に打明け語りたい願

ヂュリ　妾が心中の誠ならば、まだ御求めない中に、皆んな貴郎へ差上げました、ではムりますが、ほんに差上げねば宜うムりましたに

ロメ　そんなら取還したいと仰有るか、そは又何故に

ヂュリ　只だ改めて、澤山に差上げたい爲め計り、とはいへ是は不足のないものを、所望すると申すもの、此胸の中に、情は海と廣く、愛は大海と深きものを、酌めども盡きぬ愛と情進らするが多ければ、身に添ふことも多い道理

（と此時奥にて乳母の呼ぶ聲する）

何やら人聲が致します、戀しの郎、さらばでムります――今直ぐに行くわいな、コレ乳母――モンテーグ樣、アノ矢ッ張りお待ちなされて

下さりませ、又直ぐに參ります

ヂュリエット　と退場

ロメ　おゝたのしの夜や、嬉しの夜や、たゞこは夜中の事なれば、一場の夢と覺めは果てずや、現には餘りに嬉し、うらはづかし

ヂュリエット再登場（二階の窓に）

ヂュリ　ロメオ樣、あと二言か三言計り、それてお別れと致しませう、貴郎は眞實、妾を愛しいと思召下されて、それて結婚をとの、御志が定ならば、明日此方から、使の者を差上げませう程に、何時何處で式を擧げうといふことを、密と御報知下さりまし、その上は、此妾が運も未來も、たゞ貴郎の前へ投出して、何處へなりと、貴郎の御側は離れぬ覺悟

乳母（奥より）お嬢樣

ヂュリ　今直ぐに往くわいのう――乍去貴郎の御心ては、たゞ一時の御慰みと思召すなら、そんなら何卒――

乳母（奥より）　お嬢様

ヂュリ　たつた今往くわいのう――そんなら何卒、此まゝ妾を打棄て、そしてたんと泣かして下さりまし、兎も角も明日使を差上げますぞ、へ

ロメ　イヤ其様なさもしい心は――

ヂュリ　これでお別れ申します、幾重にも御機嫌よう

と退場

ロメ　汝といふ光明が去る上は、夜は黒々幾重の闇ぢや、妹許通ふ心は手習兒が、草紙を離るゝやうなれど、歸る旦は机の前へ、すぐ〳〵進む力なさ

と遲々として退き行く

ヂュリエット又窓の上に現れ出る

ヂュリ　コレ申し、ロメオ様、申し――おゝ飛ぶ鷹を呼返す、鷹匠の聲があつたなら――戀に縛らるゝ身は咽喉も塞り、聲さへ高くは出ぬわいの、さもなくば、ロメオといふ御名を呼んで〳〵、木魂の住むてふ洞穴も、ゆするばかりの聲を立て、遠がの木魂も、息も出ぬやうにさせうものを

ロメ　ハテ我名を呼ぶ聲の致すは我心であらう、さるにても夜中に、銀鈴を振るが如き、戀人の聲を聞けば、すゞまやかなる樂の音に、耳傾くる思ひが致す

ヂュリ　ロメオ様――

ロメ　ヂュリエット殿か

ヂュリ　アノ明日は、何時頃使の者を差上ませう

ロメ　九時頃に

ヂュリ　そんなら間違なく、おゝその時迄は、まだ二十年もあるやうでムります、これはしたり、何故、貴郎をお呼還し申したか、我ながら忘れ果てました

ロメ　想出す迄、某は此處にお待ち申さう

ヂュリ　そんなら貴郎を、何時迄も御留め申すやうに、何時迄も忘れて居りませう、たゞ貴郎の御側に居る、嬉しさだけを忘れずに

ロメ　某も絶えず卿に忘れさするやうに、何時迄もこゝに居りませう、只此處の外、我家も外家も忘れ果てゝ、

ヂュリ　最早夜明に間もあるまい、御歸宅が望ましうムりますが、アノ小娘

が手飼の小鳥を翫弄物にして、鎖につなぐ囚人でも扱ふやうに、今手放にするかと思へば、又絹紐を手繰つて引戻し、可愛い餘り、自由にさするも嫉ましい、そのやうに妾も貴郎を――

ロメ　此身も卿が、手中の鳥となりたいもの

ヂュリ　妾もどうぞそのやうに、イヤ〳〵乍然、餘り可愛がりが度を過ぎて、貴郎といふ小鳥をば弄ひ殺すでムりませう、さらば、お別れに致します、お休み遊ばしませ、ほんに別れといふは、辛い懐かしいものでムります、さらば〳〵を朝迄も、云ひ續けたうムります

と退場

ロメ　睡眠よ卿が瞼に、平和よ卿が胸に宿れ、おゝ我も睡眠となり、平和となつて、彼の樣な好い宿處に宿りたいもの、――さてこれより某は、彼

の上人の庵室を訪れ、此幸運の一伍一什を打明て、懇ろなる助言を乞ひ申さう

と退場

第三場　同　ラウレンス上人の庵室

ラウレンス上人籠を携へ登場

上人　灰色なせる曉の眼が、澁面作る夜を見て微笑めば、東の空には横雲渡り班なす開は醉漢の如くよろめきつゝ、ダイタン(神)が、禁車廻り來る、日の通路より去らむとす、アノ日輪が、今日の此日を樂しくし、夜の間の露を干さむとて、燃ゆるが如き眼を擧げざる中、此柳條の籠に藥艸を摘み、芳ばしの花をさい盛らむ、地は造化の母にして、又そが墳墓

なるが、其墳塞は又造化の胎内にして、其胎内より出る種々の子等は、地上なる自然の胸の乳房を吸ひ、大方幾多の美點あり、一つとして化なるはなく、而かもそれ〳〵に品かわれり、おゝ草木金石、及び其が效用の中に潜める、天賜の恩惠ぞ偉大なる、凡そ地上の物何物か、特殊の貢献を人間に致さゞる、然れども之を濫用すれば、百效忽ち廢して、本來の美質を失はざるものあることなし、用方一歩を誤れば、善も惡となり、適宜に之を用れば、惡も時に美化することあり、例へば此纖弱き花の、若き蕚の中には、毒あり又藥あり、則ち之を嗅げば香氣ありて、全身の慰安となれども、之を嘗れば、心臟忽ちに痲痺して、五感皆亡ぶが如し、されどもかくの如く、藥毒並び存ずる事は、此一草のみならず、あらゆる草木皆然り、人間亦此の如し、善惡好惡即ち是なり、さて其藥毒

一度衡を失ひ、毒の溺ること多ければ、死病忽ちに襲來り、其植物は枯果てむ――

ロメオ登場

ロメオ　お早うムります、上人

上人　これは〳〵、早朝から嬉しくも聲を懸るは何誰ぢや、おゝロメオ殿、かやうに早々寢床を離るゝとは、コリャ何ぞ屈托事があると見える、老人の眼には、凡て心配といふものが、終夜の番を致し居る、そして心配の宿る所には、睡眠といふものが來らぬものぢや、乍去無病無疵の若者で、屈托もない者が四肢を伸す時は、結構な睡眠が來るものぢやに、卿がかう早起を致されたは、何ぞ心にかゝる煩ひのある故、若しさもなくば、ロメオ殿には終夜、寢に就かなんだと推察致すが、よも之に

相間違はムるまい

ロメ　其の最後の御推察通りでムります、去りながらそれ故某は、至大の安慰を得ましてムります

上人　おゝ神よ、人の子の罪を宥させ給へ、ハゝ、ア卿はロザリン嬢の許へ參られたな

ロメ　上人、ロザリン嬢の許と仰有りますか、イヤ〳〵某は、其樣な名は忘れ果てゝ了ひました、また其名に伴ふ悲みも、忘れ果てましてムります

上人　それでこそ天晴な若者、乍去、然らば昨夜は、何處でお過しやつたぞ

ロメ　二度と御訓詞のない内に、お話し申上ます、某は怨敵方の宴席に連なりました所、俄かに或一人の爲めに傷つけられ、其者も亦、某故に傷

を被りました、さて我等兩人が治療の道は、上人が御助力と、御匕加減の中にムります、上人、某は敵ながら、露悟惡の念をも抱きませぬ、かく某より御願申上る事は、敵なる其者にも、恩惠を與ふる事でムります

上人　もつと明白にお話しあれ、婉曲い言葉は廢して下され、謎のやうな

ロメ　然らば明白に申上ます、某は彼の富人カプレットの愛孃に、心からの愛情を注ぐに至りました、又某が彼孃を愛するやうに、彼孃も亦某を愛します、そして何事も、ちやんと極めてムります、只此上は聖き婚姻に依て、上人の御手づから、緣の糸を御結合せ下さるを、待つ斗りでムります、何時何處で、何うして邂逅を致し、互に心を打明け合ひ、堅き契をかはせしや、其邊とくとかう歩みながら、御話し致すでムりませう、乍去何卒我等兩人を今日中に、婚儀を致すやう御取斗ひ下さりませ

上人　南無聖フランシス――こはそも何たる變り樣、さばかり切なる愛を注ぎしロザリンは、かくもはかなく棄てられしか、若者の戀といふは、實際は心の底に横はるならで、眼中に假泊ると見えたり、おゝマリアの子なるイエス、クリストも聞しめせ、ロザリン故に、卿が青白き頰の上を洗ひてし、苦き涙は幾斛なりけむ、卿が戀の藥味にとて、げに如何計りの涙の鹽か、無益に費されて了んぬるに、今は些の鹽味をだに殘さぬとは、卿が空中に充たせし嘆息の蒸氣は、未だ日輪も拂ひ盡さじ、卿が古き呻吟の聲は、まだ拙老が老ぼれた耳にも響くものを、見よ卿が頰の上にも、拭ひ去られぬ涙の痕が殘れるならずや、我は昨日の我な

らず、彼の悲みも、眞實の悲にてはあらざりしとは云はれまい、さらば其悲みはみンなロザリン故でありしぞや、然るに今日の此變りやう、さてはかゝる諺も出てつべし、男心だにかく變り易くば、女の浮氣は尤むべきかはと

ロメ　上人には、某がロザリンを戀ふることを、度々御叱りなされました

上人　戀を致すことをてはムらぬ、戀に溺るゝことをてムる

ロメ　そして汝が戀を葬れとの御仰せ

上人　古き戀を葬りて、新しき戀を、堀り出せとの事ではムらぬ

ロメ　何卒其樣に御叱り下されますな、此度の某が戀は、想ひ想はれ、慕ひ慕はるゝ間でムります、前のには、左樣なことはムりませなんだに

上人　おゝ彼のロザリンは、卿が戀こそ、腑にも落ちぬ文句をば、晴諚に讀む戀ぢやと見拔いたな、乍去、コレ浮氣者、一緒に參れ、承知のならぬ所なれども、考ふる所あるに依て、拙者が助力を致して進ぜう、此結婚故に、兩家の壓轢を變じて、和親を結ばしむる端緒ともならば、それぞ此上なき大幸なる

ロメ　おゝさらば參りませう、某は心が急いてなりませぬ

上人　急くまい〳〵、靜に、落ちついて、ハテ走る者は躓くぞよ

と退場

第四場　同　街上

ベンボリオ、メルクチオ登場

メルクチオ　あのロメオ殿は、何處の何うした處に居るでムらう、昨夜はとう〳〵

歸宅致さなんだとか

ベンボリオ　父の宅へは歸りませぬ、彼家の家來より承りましたが

メル　彼のへち堅娘のロザリ奴が、酷う彼をなぶりますが、今に屹度發狂致すでムらう

ベン　老カプレットの同族タイバルトより、ロメオ殿への書狀が、父の宅へ屆きました

メル　それこそ屹度決鬪狀でムらう

ベン　ロメオ殿には、返答を致さずはなるまい

メル　筆の執れる者ならば、誰なりと書面の返答は出來るでムらう

ベン　否、書面の返答はおろか、身を以て返答致さずばなりますまい、決鬪狀を付られて見れば、此方よりも勇氣を示さでは

メル　哀なる哉ロメオ、最早既に死んだも同然、白鬼の黑い眼で刺通され、戀歌の彈丸で耳を貫かれ、心臟の的は、盲目兒の練習矢で射壞されてムる、ハテこれでタイバルトの敵手が出來るものでしてタイバルトは如何なる男でムるな

ベン

メル　猫の王たるばかりでもムらぬ（タイバルトなる名は有名なる「レーナルト、ゼ、フォックス」物語中の猫の名なり故に此に謂あり）禮儀作法の雅びた側にかけては、一方の勇將、それで劍道に於ては、譜に合せて琴を彈くやうに、間拍子を正しく合せ、一、二の短かい間を置て、三で敵手の胸を衝くと申す風、小さい絹扣鈕を、過たず斬る手のさえやう、たしかに劍客でムる、先づ名門の華胄、喧嘩の仕樣を心得た武士でムらう、あゝ打込む太刀の素早さ、敵手を外らして打つ秘術、巧みに急處を刺す伎倆

ベン　刺す何と仰せられた

メル　イヤ、大言壯語の、氣取屋の、滑稽漢の、流行語の問屋でムる、イヤ神懸けて好劍客、勇氣勃々たる好色漢でムる、コレ老人、世の中にかういふ輕薄な蠅蜻蛉が飛廻るとは、實に嘆かはしい事ではムらぬか、流行を追ふ似不似紳士、何事も舊來のでは安んぜず、新らしいのを新らしいのをと求め廻り、佛蘭語で知つたか振り、おゝ彼の佛蘭語が〳〵

ロメオ登場

ベン　イヤ、ロメオ殿が參られた、ロメオ殿が

メル　腸を拔かれた鯡といふ風で、ぐんにやりとして居らるゝ、おゝいかなれば其樣に鯡化しては仕舞はれた、衰れや今はペトラルカが戀歌中の男となられたか、乍去ラウラも彼が戀人(ロザリン)に比ぶれば、下女や

婢に過ぎざらむ(ペトラルカはラウラを愛するの餘り、ラウラに宛てゝ無數の戀歌か詠じたり故に此語あり)ても、ラウラは善い戀人に思はれて、歌に殘るとは仕合者、又はヂドウもたわけ女、クレオパトラも乞食女、ヘレンもヘローも賣女すべた、碧眼のシズビも何のその——モシ、ロメオ殿、ボンヂユール(佛語にて「今日は」)——これは貴殿が佛蘭式の洋袴を穿かるゝに依て、佛蘭式の挨拶を致すのでムる、昨夜はまんまと我等をお欺瞞しなされたな

ロメ　お早うムる御兩所、欺瞞したとは何を

メル　イヤサ、すつぽかしを、お食はせなされたと申す事

ロメ　御免あれメルクチオ殿、實は重大な所用がムりました故、イヤ此樣な場合には、えて人は作法を超絶するものでムる

と是よりロメとメルとの間に地口、口合を交へたる滑稽の問答なな

し居る中、乳母とピータア登場

メル　誰か來た〳〵

ベン　しかも二人で洋袴に女袴

乳母　コレ、ピーター

ピー　唯々

乳母　扇を出してたもれ（當時扇は甚だ大にして之を携帶するには下男を一人要せしとぞ）

メル　コレ、ピーター、顏を隠す爲めに出してやれ、どちらかといふと、顏よりは扇の方が奇麗で宜い

乳母　コレは皆樣方、今日は

メル　コレは令夫人、今晩は

乳　最早日暮でムりますか

メル　さうとも〳〵、日時計の浮氣な針が、丁度正午の處を指した所ぢや

乳　御冗談ばかり、貴君はマア何といふ御方でムりませう

ロメ　是は神樣が壞す爲めに、お作りなされた人間ぢや

乳母　壞す爲めにお作りなされたとは、よう云はれました、皆樣に伺ひますが、アノ、ロメオの若君は、何處にお在遊ばすか、御存じでムりませうか

ロメ　それは某が存じて居る、乍去其若君も、卿が尋ね當てた其時には、尋ねて居る今よりも、少々老ける事でムらう、誰あらう此某こそ、ロメオと申す名の、一番若いやくざものでムる

乳　よう仰有て下さりました

メル　何ぢややくざ者がよいと申すか、實に是は了解のよい事ぢや、道が

乳　貴君がロメオ様て入らつしやるなら、少し御商議申したい事が

ベン　彼女奴ロメオ殿をば、何處ぞの晩餐にでも、招待致すのてムらう

メル　イヤ此奴は慶庵婆ぢや、さうぢや〳〵、ソーホー（これは獵師が獸を見出せし時の感聲）

ロメ　何をお見付なされましたな

メル　兎てはムらぬ、若し兎ならば、レント（州名）流の燒饒頭の中に入れた兎て、食はぬ中から、少々古くなつて黴臭いのでムる——

（と次の歌を歌ふ）

黴の生えた古兎、黴の生えた古兎

レントの國ては善い御馳走

黴の生えた古兎、二十人ても食切れぬ

食はぬ中からかびた時——

ロメオ殿、貴殿は父君の許へ御歸りなされますか、我等も參上致して

晝食を致す積でムる

ロメ　御後から參じませう

メル　然らばお先きへ、さらば老夫人

（と歌を謠ひながらベン、メル退場）

乳母　左樣ならば——マ、何といふ、御意地の悪い人てムりませう、惡口ば

つかり

ロメ　イヤ乳母殿、彼は己一人て喋るが好きな御方て、一月中に考へる事

よりも、もつと餘計を、一分間に喋るといふ仁ぢや

乳　此姿を何ぞ賤しい者のやうに罵すなら、縱令どのやうに強い御方

であらうと、よしや彼の樣な者が二三十人一緒にならうと、其儘にして置かうかいな、若し自分の手に叶はずば、人手を頼んでなりと、屹度復讐を致します、ほんに卑怯な御方、此妾は彼の方々のお遊びなさる、莫連女とは違ひます、賤しい者ではムりませぬ、――（ピーターに向ひ）そして又御前迄が、傍に立て見て居ながら、此身が他人になぶらるゝを見て見ぬ振は何ぢやいな

ピーター　イヤ誰が貴女をなぶつたか、そのやうな事見た覺えは此身にない、若しそのやうな事見やうなら、此刀が飛出さいで、ハテ此身ぢやとて、然るべき喧嘩で、此方が正當と見たならば、機會を見次第引拔かいで置くものか

乳　おゝ妾は腹が立て〳〵、躰軀中が顫えるやうな――それはさうと

一言申上度事と申すは、前にも申上た通り、妾が御主人の御嬢樣、貴君をお捜し申せとの仰付、乍去貴君に申上よとの、御傳言は暫く申上ませぬ、先づ御話し申して置きたいは、よもや貴君は、お嬢樣をお瞞し申し、ほんの一時の嬉しがらせを、おさせ申すのではムりますまいな、それならば、飛んだ卑劣な御擧動でムりますぞへ、お嬢樣は未だお年の行かぬ事故、お瞞し申しなどなされたなら、それこそほんに、婦人に對する大惡事で、さもしい御所業でムりませう

ロメ　コレ乳母殿、お嬢樣に宜しく申上て呉りやれ、某は和女の前で誓文――

乳　コレは〳〵、お嬢樣に其事をお話し申ませう、どれ程かお喜びなされませう

ロメ　コレ〳〵、乳母殿、何をお話し申すのぢや、和女は某の申す事を聞きもせいて

乳　貴君が誓文をお立てなされたことを、お話し申すのでムります、これこそほんに男らしい、立派な御行狀でムりませう

ロメ　それは兎も角、今日午後いかにもして、ラウレンス上人の庵室迄お忍びなされ、其處にて懺悔の式をなし、結婚を致すやうにと、御話し申して下され、これは少し斗りなれど、汝へわざと（と貨幣を握らする）

乳　お止しなされませ、一文なりと頂戴などは

ロメ　ハテサ、取て置け〳〵

乳　して、今日午後でムりますな、宜しうムります、仰せの場處へお忍ばせ申しませう

ロメ　一寸待て下され、乳母殿、これから直ぐ家來に、繩梯子のやうに作たものを持たせて、寺の外塀の後迄遣しませう程に、汝は其處で受取て置て下され、忍ぶ夜毎はそれを傳へて、歡樂の有頂天へ登る積り、さらば、よう世話を賴む、御謝禮は屹度致すであらう、おさらば、賴む御方へ宜しく申して下され

乳　神樣も御護り下され、コレもうし

ロメ　何ぢや乳母殿

乳　御家來と申すは、大丈夫な者でムりますか、二人で守る秘密は易けれど、最一人這入れば六かしいとやら、申すではムりませぬか

ロメ　大丈夫、鋼のやうに堅い男ぢや、

乳　それならば宜しうムります、ほんにお孃樣は、いとしらしいお娘て

ムりますな、それ〳〵まだ片言交りのお小さかつた時のお可愛らしさ――おゝ市の貴族でパリスとか申すお方、此お方のお嬢様に御執心と申したら、それに引かへ、お嬢様は、彼んな男に逢よりは、蟾蜍に逢うたがましと仰有ります、時と致すと妾が、それをお叱り申して、パリス殿こそ、誰にも優る美い男と申上れば、其時の御様子、丸で白布のやうに眞青におなりなされます、想へば勿忘艸のローズ、メリーと、ロメオといふ貴君の御名とは、同じ頭字でムりませうな

ロメ　いかにもさうぢやが、それが何うぢやと申すな、兩者ともRといふ字で始まる

乳　そのやうな御冗談ばかり、それは犬の名でムります、Rといふは犬の――イヤ〳〵別の字で始まるに相違ムりませぬ、（Rといふ字は、其アールなる音犬のうなり聲に似たる故古來犬の字と稱せらる、然るに乳母は素より無學にしてロメオのロとローズメリーのロとが此のRなる犬の字を頭字にするとは思ひもかけぬなり故に此語あり）――そして御嬢様はローズメリーといふ、床しい音と同様な音が、貴君の御名に付て居る故、それで貴君をもお慕ひ申すのでムりませう

コメ　其御嬢様に宜しく申して下され

とロメ退場

乳母　ハイ〳〵千遍も萬遍も申します――コレ、ピーター殿

ピー　ハイ

乳　サア〳〵前へ立て行きや、そして大急ぎで行かうぞへ

と退場

第五場——仝　カプレット邸の庭園

ヂュリエット登場

ヂュリエット　乳母を使に出した時、丁度九時が打つたばつかり、半時たゝぬ中に、歸つて來ると云置いたれど、大方御目に懸ることが出來ぬのか、イヤ〳〵そんな事は、おゝ乳母は跛足も同然、戀の使といふものは、山の彼方に影を追やる、日の光よりももつと早い、此胸に通ふ「思ひ」といふものにして欲しや、それ故にこそ、翼の早い鳩は、戀の女神（ヴィーナス）の輦を引き、それ故にこそ、風と早い戀童子は、翼を具有つとかや、今は既や日も、今日の旅路の峠にかゝつたに、九時から十二時迄の、長い〳〵三時間、それにまだ歸らぬとは、若し彼の乳母に情があり、若い溫かい血があるならば、球のやうにも敏捷からう、さらば乳母といふ球を、妾の口上て、思ふ御方の方へ送り、彼方からは又此方へ送らうもの、それに老人といふものは、ほんに〳〵死んだやう、鈍い遲い重苦しい、鉛のやうに青白い——

乳母ピーターと共に登場

おゝ歸つた〳〵——おゝ乳母や、樣子は何とぢや、彼の御方に御目に懸つてか、供の者は彼方へ遣りや、

乳　ピーター、其方は門戸に待て居や

ピーター退場

ヂュリ　コレいとしの乳母——そのやうに、何故悲しげな顏をして居やる、たとひ吉左右ではないとても、たのしさうに話してたべ、若し吉左右

なら、其吉左右の嬉しい音色を、そのやうな苦い顔で彈くは、無躾ぢやぞへ

乳　妾はくたびれましてムります、暫時御免されて下さりませ、おゝ節骨の痛むこと、散々尋ねあぐみましたわいなァ

ヂュリ　妾の節骨を汝に讓り、汝の吉左右を此方へ貰ひたい、何卒々々、はやう話して聞かせてたべ、コレ乳母話してたべや

乳　何といふ遽たゝしい、少しも御待ち遊ばすことはなりませぬか、此のやうに、息もつけぬ程になつて居りますのが、御目には留まりませぬか

ヂュリ　それそのやうに、息もつけぬ程になつて居るといふことを云ひながら、息が吐けぬとは何うした事ぢや、延引の申譯が、其申譯をする、本文よりも却て長い、コレ返事は吉か、凶か、云うて見や、それさへ聞けば、詳しい事は待たうぞや、早う安心させてたべ、コレ吉か凶か

乳　ほんに貴嬢は、飛んだ御方を御選びなされましたな、男の持ち方を御存じない、ロメオ樣――彼はそんな御方てはムりませぬ、御顏は誰にも負けず美けれども、並外れて御脚の長い、手首足首、胴躰などは是ぞと申す事もなけれども、皆爪外れの尋常さ、禮儀作法の花と申す方てはないけれど、ほんに小羊のやうな溫順しさ、コレサ、御信神を專一になさりませ、最早御畫食は御濟みなされましたか

ヂュリ　イヤ〳〵、そんな事は其方に聞かずと知て居る、アノ結婚の事は、何と仰せられたか、それに就て何ぞ

乳　おゝ岑々と頭の痛むこと、何といふ因果な頭でムりませう、微塵に

破れて、落ちもするかと思ふやうなうづきやう、それに後では又背が、おゝ此背が〳〵、彼方此方と尋ねあぐんで、死ぬやうな目に遇ふとは、妾を使に御出し下された、貴嬢の御心が恨めしい

ヂュリ　ほんにそのやうな苦みを見せたは氣の毒な、コレ、いとしい〳〵いとしの乳母、彼の御方は何う仰せられたか云つてたもれ

乳　彼の御方は、ほんに正直な、お行儀のよい、親切な、美しい、そしてほんに〳〵高潔い男らしく、妾に仰せられますには――御母様は何處に御在遊ばします

ヂュリ　御母様は何處に御在遊ばす、内に御在遊ばすわいな、何處へ御出で遊ばさう、ても其方は不思議の應答を致しやる、彼の御方はほんに正直な――男らしう、仰せられますには、御母様は何處に御在遊ばします」

乳　おゝお嬢様、そのやうにお急き遊ばしますか、さて〳〵これが、妾を此様な辛度い目に、お逢はせなされた御返報か、是から後は、御自分の御用は御自分で遊ばしませ

ヂュリ　大層らしい、ぎやう〳〵しい――してロメオ様の仰せは

乳　それはさうと貴嬢は、今日寺參を遊ばしても、よいといふ御許可が出ましたか

ヂュリ　出たわい喃

乳　そんなら御寺から、ラウレンス上人の庵室へ御廻りなされませ、其處に旦那様が、貴嬢を奥様にしやうとて、待てお在なされます、それそのやうに、御頰の上は韓紅、どのやうな事でも、直に眞紅におなり遊ば

します、先づ〳〵御寺へ御急ぎなされませ、妾はまた別の處へ、梯子を取に參ります、是は彼の御方が、夜分になると、鳥の巣へ御上りなさる爲めのお道具でムります、ほんに妾はたゞ貴嬢さへ御喜び下さるなら、どの樣な事でも致します、乍去貴嬢も夜分になると、直に御仕事がお殖ゑなされます、ほゝ妾は御仮を頂戴致します、貴嬢は庵室へ御急ぎなされませ

ヂュリ　そんなら急いで、身に廻て來た運を外さぬやう――さらば、乳母

と退場

第六場――同　ラウレンス上人の庵室

ラウレンス上人、ロメオ登場

上人　仰ぎ願くは、此聖き行爲（結婚を指す）に、天も微笑ませ給ひて、後に悲みの撻を下し給はざらむことを

ロメオ　アーメン、アーメン――とは申せ、たとひ如何なる悲みが來らうとも、彼女故某が受けし喜悦を、寸時の間だも滅ぼす事はよも出來まい、上人の御手づから、貴き御詞もて、二人の手を一度御結び合せ下さらば、たとひ死といふ怪物が現れ出て、二人が中の愛を喰ひ裂かうと、某は彼女を我がものと呼びたるのみにてたゞ滿足に思ひませう

上人　其樣に猛烈な歡樂は、又猛烈に終るもの、恰も火と火藥との其の如く、歡合の最中に燃え滅りて、燦爛の中に終るものぢや、甘露の甘きも其甘き中に嫌氣がさし、味ふ間に食慾も消ゆる習ひ、されば戀も程善く戀るがよし、さてこそ長持も致すべけれ、何事も過ぎたるは、猶ほ及

ばさるに等しいぞや

ヂユリエツト登場

おゝ嬢の御來ぢや、さても輕やかな其足取、花を踏んでも散しはすまい、げに戀する者は、夏野にかげらふ、遊糸に乘ても落ちはせまい、戀の歡樂はそのやうにも浮々しいものか

ヂユリ　上人、御機嫌克う

上人　其返答はロメオ殿より、二人を兼て致すでムらう

ヂユリ　そんならロメオ樣にも御機嫌克う、かう申上ぬと、御返答では恐入ります

ロメ　おゝヂユリエツト殿、そもじの喜びも、某同樣に深く、そしてそれを口頭に表白す術は、某よりも巧みであらうに、そもじの呼吸で此四邊を蕩らせて、樂の音のやうな其聲で、今日の此日の、互の胸のたのしさを、詞に述べて聞かせてたもれ

ヂユリ　詞よりも實質のある戀は、口先の虛飾よりも實のあるが自慢でムります、どれ程の額と算へるは貧しい故、心からなる妾が戀は、其額の半分も、算へることは叶はぬ程でムります

上人　イザ〳〵此方へ、手早く事を濟すでムらう、此上は、何時迄此まゝに爲し置くべき、神聖なる神の御手は、卿等二人をやをら一躰と爲し給はむ

一同退場

第三幕

第一場　ヴロナ　大道側

メルクチオ、ベンボリオ、小姓及召使共登場

ベンボリオ　メルクチオ殿歸らうではムらぬか、大分暑くなつて參つた上、カプレット家の奴原が出て居りませう、若し邂逅せたなら、喧嘩は免かれませぬ、かういふ暑い日には、人々の血も躁ぎ立つものでムります

メルクチオ　世には旅亭の閾を跨げば、卓上に劍を敲きつけ、おゝ神よ、我に汝(劍)を用るの、機會を與へ給はざれ」など、獨語つかと思へば、二杯目の酒が廻るや否、其劍を拔て理由もなく、給仕共を嚇やかす者がムるが、貴殿も其一人でムるな

ベン　何、某が左樣の者の一人でムると

メル　コレ、貴殿は此伊太利國で、誰にも劣らぬ氣早者、些細の事に動かされて怒り易く、怒り易ければ、又動かされ易いと申す男

ベン　動かされて、さて何う致すと申すので

メル　イヤサ、貴殿の樣な者が二人あつたなら、互に殺し合う故、忽ち一人も、居らぬ事にならうと申す事、ハテ貴殿は、鬚が一本自分よりも、多いとか少いとかで、人と喧嘩をしやうといふ男、自分の眼が胡桃色といふ外、何の理由もないに、人が胡桃を潰したとて喧嘩をせらるゝげに其樣な眼ならで、左樣な喧嘩を見付出す眼が何處にあらう、貴殿の頭には、鷄卵の中味の樣に、喧嘩が詰まつて居ると見える、併し餘り喧嘩を致すので、打ちのめされて腐れ鷄卵のやうに腐つてムる、日南ぼこ

りをしながら、眠て居る犬を覺したとて、街上で咳嗽をした男と、爭はれた事もあるてはムらぬか、仕立屋が復活祭前に、新調の胴衣を着用致したと申して、喧嘩はせなんだか、又或人が、新調の靴を、古紐で結んだとて、いさかひを致した事はムらぬか、それに何ぞや、某に喧嘩を避けいなどゝ誠めらるゝ

ベン　イヤ某が、若しも貴殿程に喧嘩好であるならば、誰なりと買度いと申す者に凡そ一時餘りが間、此生命を賣るでムらうに

メル　何生命、阿呆らしい

タイバルト其他若干名登場

ベン　ヤア、カプレットの奴原、御參なれ

メル　搆ふ事はムらぬ

タイバルト　者共後から直ぐに參れ、彼奴等に一言申して見たい事が――コレ、御兩所、何誰でも、御一方に、一言申したい事がムる

メル　して只一言のみでムるか、何かそれに伴ふものはムらぬか、ハテ寧そ一言と一太刀と御云ひやれい

タイ　貴殿の方から仕懸けるなら、それも致し兼ねは致すまい

メル　仕懸られずば、自分から仕懸る事は出來ぬと見える

タイ　コレ、メルクチオ、貴殿はロメオと連れ引き――

メル　何、連彈、貴殿は我等を門附の樂人と御思ひなさるか、たとひ樂人ど思はうとも、我等から御耳に入れるは、ちと御耳觸りの惡い事計りでムらう、これが某の提琴でムる（帶劍を指していふ）これが貴殿方に躍りを躍らせる樂器でムる、ヘン連彈ぢやと

ベン　コレ〳〵、茲は諸人の集ふ所でムる、何處ぞ諸人の來ぬ處へ參るか、さもなくばお互に物靜に述べたい事を述べやうではムらぬか、それもならずば此儘御別れが宜しい、大勢の眼が我等を見てムるに

メル　人の眼は見る樣に作られしもの故、勝手に見さするが宜い、某は他人がどうのからうのと申す爲めに、一歩も動くことではムらぬ

ロメオ登場

タイ　イヤ、貴殿とはこれで媾和を致すでムらう、某が尋ぬる男がこれへ參つた

メル　何、彼が貴殿の僕ぢや、ヤイ、ロメオは貴殿の仕着は着て居らぬぞ、イヤサ貴殿が、先づ決闘の場へ赴かれうなら、ロメオ殿は屹度後から參るでムらう、後から參るが從者といふ意味ならば、如何にも、貴殿には

ロメオ殿を從者と仰せあるも尤もかい

タイ　ロメオ殿、某が貴殿を憎むの念は、これより以上の挨拶を許し申さぬ——汝は惡黨なり

ロメ　タイバルト殿、某には貴殿を愛する理由がムる、その理由が、其樣な御挨拶を受ても、立つべき腹を宥めて呉れます、それは兎に角、某は惡黨ではムらぬ、さらばでムる、貴殿はまだ某の事を御存じない

タイ　コレ二才殿、それで貴殿が、某に加へた侮辱の辯解にはなりますまい、イザ腫を回してお拔きなされ

ロメ　イヤ誓文某は、貴殿に侮辱を加へた事はムらぬ、却て貴殿が思ひもつかぬ程、貴殿を愛するものでムる、いつかは其理由も御了解になるでムらう、されば力プレット家の一人なる貴殿には、これで滿足致し

て下され、某はカプレットなる家名をば、自分の家名同様、懐かしいものに思ひ申す

メル　おゝこれは又、従順しい不面目な卑怯な屈従てムる、寧そ此一衝て、さうぢや、（と抜剣し）タイバルト、コレ鼠捕殿、イザ行く處（決闘すべき場處へ赴かむの意）へ行かうてはムらぬか

タイ　某に何御用がムれば

メル　コレサ、猫帝（前にも註せし如くタイバルトなる名は狐物語中の猫の名なる故に此語あり）用と申すは足下が九つの命（猫には九つの命ありといふ傳説あり）の中の、一つを頂戴致したい、其上て尚ほ足下の擧動に依ては、後の八つをも、ひしぎ潰さぬとも申されぬ、其耳の様な、鍔元を持て、剣の鞘を拂つてはどうぢや、サヽ、急ぎめされ、さらずは某の剣の方て、足下の耳元へ冷やりと参るてムらう

タイ　宜しい御相手を致さう（と抜剣する）　と両人斬合ふ

ロメ　コレ、メルクチオ殿、其刃を納められい

メル　サア來い、ヤイ、手並を見せい

ロメ　ベンボリオ殿、貴殿も拔て、両人の剣を擊落しめされ、コレ御両所、恥辱てムる、お止めなされい、コレサ、タイバルト、メルクチオ、殿下が御口づから、ゼロナの市街て、此様な爭鬪を、禁ぜられたてはムらぬか、留れ

タイバルト殿、メルクチオ

とロメオ両人の中へ割込む、其腕の下よりタイバルト、メルクチオを刺し黨類と共に逃れ去る

メル　某は傷れました、えゝ禍よ両家の上に――今は早や萬事休す――彼奴は去りましたか――薄傷一つも負はずに

ベン　何と、傷を負うたと

メル　ひつかゝれました〳〵、乍去これで十分でムる、小姓は何處ぢや、早う往て、醫師を呼んで參れ

と小姓退場

ロメ　しつかりなされい、御傷は重い事はムるまい

メル　いかにも井程の深さもムらぬ、又寺の扉程の廣さもムらぬ、乍去拙者には、此傷で十分で遺憾もない、明日御尋ね下され、墓の中で御目に懸らう、此世の用事も早や是迄――えゝ忌まはしきは兩家の確執――一人を引掻き殺すとは犬の樣な鼠の樣な、猫の樣な男、えゝあの算術て算へた樣な劍を遣ふ、惡黨、法螺吹、破籠恥漢――シテ貴殿には、何故兩人の中へ割て入られた、某は其時、貴殿の腕の下より斬られたので

ムる

ロメ　某はまた、善かれと思うてなした業

メル　ベンボリオ殿、何處ぞ家の中へ持込んで給はれ、此儘ては氣を取失ひさうでムる――えゝ忌まはしき兩家の確執、彼等故に某は、とうとう蛆虫の餌食となされました、あゝ酷い目に逢うたものぢや、兩家の確執故に

とメルクチオ、ベンボリオ退場

ロメ　殿下の近親にして、我が心友なるメルクチオは、我故に此深傷、又我が名譽は、タイバルトの誹謗故に汚されたり――おゝ一時前から、親族となつた斗りのタイバルト故に、さるにてもいとしのヂユリエット、汝が美貌は、我をめめしの男となし、我心中に、勇氣の刃を鈍らせし

か

ベンボリオ再登場

ベン　おゝロメオ、ロメオ殿、メルクチオ殿は死りましたぞ、彼の勇敢な精神は時ならずも此世を厭ひ、雲の彼方に慕ひ寄られました

ロメ　今日の此日の不祥にて、後日の事も思ひ遣らるゝ、これぞ正しく凶事の手始め、禍は踵を繼て來るべし

タイバルト再登場

ベン　凶猛なるタイバルトが、又もや茲へ參りしな

ロメ　しかも生存へて勝誇て、討手のメルクチオは殺されたるに、おゝ今は親兄を敬ふ心も消え失せよ、血眼なる憤怒神よ我を導け、コレ、タイバルト殿、先刻頂戴致した、「惡黨」の稱號を返還致す、聞けメルクチオが魂魄は、我等が頭上に彷徨ひて、貴殿が魂魄の往いて同伴せむを待ち居るぞよ、イザ〳〵貴殿か某か、若くは兩人諸共にか、是非同伴致さではなるまい

タイ　哀れなる哉二才殿、これ迄彼（メルクチオ）と一緒に參られたが因果、これから先も一緒に參るがよい

ロメ　何れが參るか、イザ〳〵これにて

と兩人戰ふこと、とゞタイバルト斃れる

ベン　ロメオ殿、此上は御逃げなされい、諸人が追々參る樣子、タイバルトは死にました、コレ、其樣にあきれて立てゐらぬがよい、若し捕はれたら、公には貴殿を、死刑に處する事てゐらう、早や〳〵、御逃げなされい

ロメ　おゝ此身は運命の犧牲物

ベン　何故其樣に、ぢつとして御在なさる

市民大勢登場　とロメオ退場

市民甲　メルクチオを殺せし奴は何處へ往つた、殺人のタイバルトは何處へ逃げた

ベン　其タイバルトは、其處に倒れてゐるわ

民甲　ハテ此上は、貴殿もお連れ申さずばなるまい、殿下の御名に依て召捕りますぞ、服從めされ

ゼロナ公侍從を引連れ、モンテーグ、カプレット、各夫人と共に、其他大勢登場

公　かゝる爭鬪を惹起したるゆゝしの發頭人は何處に在るな

ベン　おゝ殿下、某こそ此不幸なる騷動の、嘆かはしき一伍一什を存じて居ります、殿下の御一族、メルクチオの君を、殺害なしたる其男は、それ其處に、ロメオ殿の爲めに、復讐されて倒れて居りまする

カプレット夫人　や、や、タイバルトではないか、おゝ彼は妾が弟の子、おゝ殿下、おゝカプレット殿、一族の血潮は流されました——殿下、御仁慈深い御心に、我等一族の血の償ひに、モンテーグ一族の、血をも御流し下さりませ、おゝいとしの者〳〵

公　ベンボリオ、此慘劇の發頭人は誰ぢや〳〵

ベン　こゝに斃れてゐるタイバルトで、ロメオ殿が手に斃れました、ロメオ殿は、初め物柔かな詞にて、爭鬪のいかばかりか愚かしきを說き、且つは殿下の御思召の程も、忘る可らざる由を、膝を折り顏を和らげ、辭

を卑うして述べましたに、和解に耳を塞げるタイバルトが、無法なる怒憤を解くに由なく、彼は却て刃をメルクチオ殿が、胸に刺さむと致しました、同じく怒りたけれるメルクチオ、さらばと勇んで立向ひ、せゝら笑て、件の毒刃を片手にかき退け、片手にえいやと衝込む太刀、タイバルトも同じく見毎に衝返す、其時ロメオは一聲高く、待て〳〵御兩所お引きなされと云ふより早く、劔を拔て兩人が、刃先を打臥せ割て入る、其下よりタイバルトが衝出す毒刃、さしも強猛なメルクチオを斃すと其儘逃げ去りましたが、間もなく又取て還し、復讐の念の今しも燃え上りたる、ロメオと渡り合ふ電光石火の瞬く間、此某が取さへむと立寄る暇もなく、タイバルトは討たれました、其討れて斃れし時、ロメオは此處を立退きましてムります、若し此陳述に詐りあらば、

ベンボリオが一命を、御取り下されても苦しうはムりませぬ

カプレット夫人　これはモンテーグ家の一族、偏頗な心でよも眞實は語るまい、イヤ〳〵彼が一族の二三十人、此爭鬪に馳加り、總掛りで漸う一人を殺したのでがなあらうわいの、殿下には、どうぞ正義の御裁判を願ひまする、ロメオこそタイバルトが下手人故、彼を生かし置くべき理由はムりますまい

公　さてはロメオ、タイバルトを殺し、タイバルト、メルクチオを殺しゝな、さて血を以て此の大罪を購ふべき者は誰ぞ

モンテーグ　殿下それはロメオではムりませぬ、彼はメルクチオ殿が親友でムりました、彼が此度の過失と申すは、たゞ國法の成遂ぐべき所を、自ら成したと申すに過ぎませぬ、即ちタイバルトが命を取りました丈で

公　ムります

其過失故に、ロメオには早速追放を申付る、卿等兩家の確執は、遂に此身にまで直接の影響を被らせしな、兩家の者共の鬪爭故に我が近親の血潮は注がれたるぞ、我は卿等を重き罪科に處し、我に此かる損害を與へしことを悔えしめむ、嘆願も辯解も聞く耳持たぬ、詫や涙で此大罪は購はせじ、ロメオをば早速放ち遣れ、さらずば見付次第命はないぞ、此屍骸は一先づ取片付て沙汰を待てい、殺人罪など打棄て置かば慈悲も却て仇とならむ

と一同退場

第二場　同　カプレット邸菓樹園

ヂユリエット登場

ヂユリエット　日神（フエーバス）の御輦（みくるま）の馬も疾く馳せて、西の海なる御ゝ宿へ早う急いでたもれいのう、御短氣の御子（みこ）フエートン（日神の子にして、父の輦に乘るを許されしに、馬を軌道の外に逸し地上に落ちんとしたる事あり）なら、西へ〳〵と鞭（むち）て〳〵、今の間に朧の夜を連れ來やうもの、おゝ戀叶はせの夜の神、早う黑い帷（とばり）を張て給はれ、さらばうるさき人目の關もたえ、ロメオ殿には、見咎めらるゝ事もなう飛んで來て、此腕の中にまつわらうもの、戀する者は闇ぢやとて、己が美しい身の光で、戀の仕草に事は缺かぬ、若し又戀が盲目なら、闇こそ別きて相應はしい、されば夜（よる）といふ黑裝束の嚴（いつく）し刀自、早う來て此妾に、初心（うぶ）な

二人の力競に負ける術を敎へてたべ、其黑い上衣の端で、此頰の上にさして來るおもはゆい血潮を包むてたべ、さらば心も廣うなりて、何をせうとも戀の誠の業くれと、うら恥かしい氣の消えもせう、夜よ來ませ、ロメオ殿早よ來ませ、夜目にも輝く君よ來ませ、「夜」の翼に乘る君が、姿を見れば、烏の背に置く初雪も、かくはあらじと思はるゝ、おゝ優しの夜や來ませ、懷かしい烏羽玉の夜や來ませ、そしてロメオ殿をおこして下され、さて彼君が後々死なられた其時は、切り細裂て星にして、夜の空を飾てたべ、世界中の人々は、只管夜にあこがれて、きらめかしい日輪などは、拜む人もなくならう、おゝ妾の今の心は、戀の宮殿を買うた斗りて未だ手に入れず、此身も亦賣りたれど賣た斗りて人手に渡らず、丁度あの祭の夜宮に、新調の衣服は出來たれど、着ること叶はて、焦れる子供の其樣に、ほんに此日の待わびしさ――おゝ乳母が歸て來た樣子

乳母繩梯子を携へ登場

何ぞ報道を持て來たか、ほんにロメオといふ御名は、誰が口より聞かうとも、天樂とやらむを聞く心地――コレ乳母、報道は何とぢや、持て參つたは何ぢや、ロメオ殿より仰付の繩梯子か

乳母　おゝその繩梯子でムります　と梯子を投出す

ヂュリ　さて吉左右は何とぢや、何故その樣に手をもがきやる（手をもがく動は悲を表す）

乳母　アヽ、マ何といふ、彼の御方は御死になされました、御死になされま

した、御死になされました、お嬢様ひよんな事になりましたなア、悲しい事になりました――お亡くなり遊ばしました、人手に殺され遊ばしました、お果てなされましたわいな

ヂュリ　神様も餘りな

乳母　神様のせいではムりませぬ、ロメオ様のせいでムります、おゝロメオ様ロメオ様――思慮もない事でムりますなア――ロメオ様

ヂュリ　又其様に妾を焦らしやるか、地獄の苛責にも優る苦みぢやわいな

ア、何とロメオ様は自害を遊ばしたとか、左様ぢやと答て見い、その「左様ぢや」こそ見る目に毒を放つてふ、毒蛇にも優りて毒ぢやぞや、若し人手に殺されたのなら、さうと云や、左もなくば否と云や、たつた一言で妾が運不運も決まるぞや

乳母　妾は御傷口を拝見致しました、此眼で拝見致しました――あゝ南無阿彌陀――あの御立派な御胸の上に――ほんにいたはしげな御死骸、いたはしげなみじめな御死骸、御色は灰の様に青白く、血みどろになつて、血でかたまつた、ほんに見たばかりで妾は氣絶致しました

ヂュリ　おゝ裂けも果てよこの心、藥拔の殼となりし妾が心よ裂けも果てよ、眼よ、今は地獄へ往け、自由な此世に用はない、無益の此身も土に還れ、此世の用は早やこれまで、さてロメオ殿と一つ車一つ柩に乘て行け

乳　おゝタイバルト様、タイバルト様、一番御頼り申した御方、おゝあの御やさしいタイバルト様、彼様に御立派な御ゝ方が、御亡なり遊ばすを見やうとは

ナユリ　何といやる、さて〳〵どんな嵐の吹廻して其様に、其方にも此方にも——ロメオ様は殺害され、タイバルト様も死なれたか、いとしの兄、尚ほそれよりもいとしの郎君、此上は天地の最期を告るてふ、天使の喇叭も鳴渡れ、彼のお二人さへ亡い今日、誰が此世に存らふべき

乳　タイバルト様はお亡くなり遊ばし、ロメオ様は御追放、アノ、タイバルト様をお殺し申した、ロメオ様は御追放になりましたのてムります

ナユリ　おゝさては——ロメオ様は御存生、たゞロメオ様が御手づから、タイバルト様の血を流せしとや

乳　左様てムります〳〵、マ何といふ、左様てムります

ナユリ　おゝそんなら、彼の美しい、花の御顔の其奥には、毒蛇の御心が潜んで居たかや、昔話の悪龍も、彼の様に美しい棲處はよも有つまい、佛顔な鬼、菩薩顔な夜叉羅刹、鳩の翼を借る鴉、小羊の皮をかぶる狼、表面は尊く裏面は賤しい、丁度見懸と正反對、さもしい聖者、高尚い悪人、おゝ彼の様な美しい、うつそみの身の樂園へ、悪魔の魂魄を封じ込むとは、造化の神も恨めしい、地獄にどうした取込のあることぞ、彼んな奇麗な書物の中に、あさましい目錄のあらうとは、おゝさばかり華美やかな殿の中に虚詐僞の潜むものか

乳　男と申す者は、ほんに當てにならぬ、頼もしうもない、不正直な者てムります、皆ンな虚言吐、皆ンな欺瞞者、皆ンな悪黨、皆ンな誓文破てムります、おゝアノ僕は何處にぢや、酒を少し持て來てたもれ、こんな悲しい、あさましい、苦しい思ひを致しては、命が縮まるやうてムります、

てもロメオ樣のお恨めしい、恥辱に食はれて死んでお仕舞なされば
よい

ヂュリ　そのやうな呪詛がましい事をいふ、其方の舌こそ爛れて仕舞や、恥
辱などを御受け遊ばすロメオ樣かいな、彼のお顏の上になど、恥辱も
恥ちてとまりはせまい、彼處こそ廣い世界を獨裁の帝君と仰かるゝ、
名譽と申す者の坐らせ給ふ高御座、おゝ其君を暫しなりとも罵ると
は、ほんに獸同然の此妾

乳　そんなら貴孃は、御自分の御從弟を殺した、下手人を御褒めなされ
ますか

ヂュリ　自分の良人を惡く云はうや、おゝ我が郎君、たつた三時前に、女房と
なつた此妾が、口づから、御名を汚して置きながら、何の舌で洗ひ清め

やう、乍去コレ申し、何故妾が一族の者をお殺しなされました、おゝそ
れは、彼從兄の方で、郎君を殺さうと致したからでムりませう、愚かし
の我涙、もとの泉へ湧き返れ、今泣く涙の其滴は悲みへの貢物、喜悅へ
捧げるは門違ひ、タイバルト殿が殺さうとした我郎君は生存へて、我
郎君を殺さうとしたタイバルト殿は死んでぢや、結句是は喜ばしい
事ばかり、そんなら何故にかう泣きやる、タイバルト殿が死んだより、
もつと一倍悲しい言葉があつた故、寧そ忘れて仕舞度けれど、おゝ、罪
ある人の心中に、犯しゝ惡事の咎むる如く、忘れ難ない其言葉「タイバ
ルト殿は殺され、ロメオ樣は――御追放」其「御追放」たつた一言の「御追
放」といふ詞は、タイバルト殿の千人萬人死んだより、もつと悲しい情
ない、たゞタイバルト殿が死んだ事斗りでも、悲しいは悲しいが、禍事

といふものは道連ならうては叶はぬか、立て道連の禍事が欲しいなら、「タイバルト殿は殺され――」といふ言葉の次へ、父様か、母様か、さては御兩人諸共、おなくなりなされたと、いふ事付ても大事ない、一通りの愁嘆をば、懸る計りてあつたらう、去りながら、タイバルト殿が死んだといふ其後へ「ロメオ様は御追放」此言葉こそ、父様母様、タイバルト様もロメオ様も此ヂユリエットも、皆ゝな死んだ殺されたといふに同じ事、「ロメオ様は御追放」おゝ此言葉には、限りもない、果もない、際涯もない、死んだといふ意味が籠つて居る、いかな言葉も、其深い悲みを、述べることは叶ふまい、コレ乳母、父様や母様は何處にぢや

乳　タイバルト様の、御遺骸の周圍に、嘆いて御在遊ばします、貴嬢も御出遊ばしますか、御案内申しませう

ヂユリ　そんなら父様母様は、タイバルト様の傷口を、涙で洗うて御在ぢやな、其涙の乾く時、妾の涙は涸れ果てう、ロメオ様の御追放故――其繩は持て行きや、でも哀れの繩、妾同様にだまされたか、コレ、ロメオ様は御追放ぢやぞ、彼君は其方（繩を指す）をば、妾が寢所への、通路と遊ばしたれど、其詮もなう處女の妾は、處女ながらの寡婦と終るばかり、コレ繩、コレ乳母、妾はこれから、新室へ參るなれど、遁ふ御方は、ロメオ様ではなうて、死の神様

乳　イヤ〳〵ともかくも御寢所へ御出遊ばしませ、此婆がロメオ様を、こゝへお連れ申して、御慰め申します、御在家は婆が承知、コレ申し、可愛いロメオ様を、今夜茲へ御連れ申しますぞへ、ドレ今から參ります、ラウレンス上人の庵室に御潜みの筈

ヂュリ　おゝそんなら御逝れ申してたべ、そして此指環を彼君に參らせて、最後の訣別に、茲迄御忍びあるやうにと申してたもれ

ト二人退場

第三場　同　ラウレンス上人の庵室

ラウレンス上人登場（外より歸りし體）

上人　ロメオ殿、内にか、出合召され、甚樣に恐がる事はない、不幸に見込まれた卿の才貌、禍とまて緣の糸を結ばれしな

ロメオ登場

ロメオ　上人、御消息は何とてムります、公の御沙汰は何とてムります、存じも寄らぬ如何なる憂事の、來ッて某に握手を求る事か、御知らせ下さ

りませ

上人　さやうな苦々しい朋輩に、卿は餘り親みが過ぎますぞ、いかにも御沙汰の報知を齎らしました

ロメオ　其の御沙汰は、神の最後の御沙汰（即ち死）より、何れ程輕うムりますな

上人　いかにも難有い御沙汰が出ましたぞ、死刑ではなうて追放でムる

ロメオ　何、追放、御慈悲ぢや程に「死刑」と仰せ下され、流浪の身は打見たる處、死するにも增して、恐ろしいものでムります、「追放」と仰せられますな

上人　ゼロナより追放との堅き御沙汰でムる、心を裕に持たしやれ世界は廣いに

ロメオ　ゼロナの牆の外に世界はムりませぬ、あるものは地獄、火宅の苦痛ばかり、されば追放の御沙汰を蒙るは、此世界より追放さるゝに異な

らず、世界を流浪の身は死せしも同然、されば「追放」とは死刑の變名、死刑を「追放」と仰せあるは、黄金の斧で首を剄る樣なもの、某の首を剄る斧の金なるを見て、上人には安心の笑顔を御見せなさるゝ

上人　おゝ其樣な罪深い事を、それは餘り恩知らずと申すもの、卿の過失は國法の死を命ずる所、そを彼のやさしい殿下なればこそ、卿を憫み國法を排して、死刑と申す恐ろしの詞を、「追放」に替へられた、これこそ御慈悲と申すもの、卿には合點が參らぬか

ロメ　慈悲ではなうて苦患でムります、デユリエットの居る、此市にこそ天國はあれ、苟も此天國に在るものは、犬でも、猫でも、小鼠でも、乃至どんな詰らぬものでも、彼女が姿を眺め得れど、ロメオばかりはそれが出來ぬ、腐肉に生く蠅さへも、ロメオに比ぶれば、生甲斐あり、面目あり、幸福ありと申すもの、彼の妙に白い、デユリエットが手にとまり、又は清淨無垢の身の初々しさ、上下の唇の接するをも、罪と思ふか、頰に潮紅の絶えた事もない、其唇に密と觸れ、限りもない幸福を盜む事も成る、追放の身のロメオにはそれも出來ぬ、飛ぶ蠅さへもかゝる享樂は有つなるに、此身は外處に高飛ぢや、彼等は自由の民此身は流浪の身、これでも追放は死刑ではないと仰せられますか、ハテ此身を殺すに、盛つた毒藥はムりませぬか、研ぎすました刃は、さては如何程卑しくとも卒に死得る方法はムりませぬか、只だ「追放」で殺さるゝは御情ない、おゝ上人、それは地獄の餓鬼が用る詞でムります、其詞には呻吟の聲が尾を引きます、懺悔を聞き、罪を濟め給ふ高僧、又某が導師たる上人にして、其忌まはしの詞「追放」で、某を嬲り殺さるゝとは餘りでムり

ます

上人　愚かしの我子、愚僧が申す所をよッく御聞あれ

ロメ　おゝ又追放の御講義てムりませう

上人　其詞の刃を避る甲を遣さう、縱令卿追放せらるゝとも、卿を慰むべきものこそあれ、即ち艱難の緩和藥なる哲學こそそれてムる

ロメ　また「追放」と仰せらるゝ、哲學も何のその、哲學てヂュリエットを作り、市を移し、王公の御沙汰を變ることが出來るなら知らぬ事、さもなくば何の役にも立ちませぬ、最早左樣の御談話は、御無用になされませ

上人　おゝ狂者には耳がないか

ロメ　賢者に眼がないに、どうして狂者に耳がムらう

上人　卿が現在の境遇に就き、ちと云ひたい事がムるのぢやが

ロメ　イヤ御自分の感ぜぬ事を、彼此と仰有ることは出來ますまい、某の樣に若年て、ヂュリエットを戀人に持ち、たつた一時前に祝言し、タイバルトを殺害し、戀に責めらるゝこと某の如く、追放せらるゝこと亦某の如くならば、其時こそ何とても仰せられ、此樣に御自分の髮をかきむしり、床の上に倒れ臥して、掘らぬ墓の尺を御取りなさるゝ事も出來ませうが（と床上に倒臥し、髮をかきむしりて悲む）

此時奥にて戸を叩く音聞ゆる

上人　コレ起きめされ、音なふ者がムる、ロメオ殿お隱れやれ

ロメ　イヤ隱れることてはムりませぬ、心の底から蒸騰る、呻吟の息が霧の樣に、此身を閉籠め、人目を遮るならばそれは兎も角

敲く音續て聞ゆる

上人　御聞きやれ、敲くは〳〵――何誰ぢや――コレ、ロメオ、お起きやれと申すに、召捕られませうぞ――鳥渡お待ちあれ――お起きやれ（益す敲く音）早や〳〵書齋へ――今直ぐに參ります――あゝ何たるたわけてムるぞ――今參ります〳〵（敲く音益す盛なり）ハテ、誰なれば左樣に遽たしう、何處から御光來ぢや、御用は何とぢや

乳母　（奥より）何卒御通しなされて下さりませ、御目に懸て用事の程は申上ます、ヂユリエット君からの使者てムります

上人　おゝ、そんなら此方へ〳〵

乳母登場

乳　おゝ上人樣〳〵、姫君の御婿君は何處にてムります、ロメオ樣は何處に御在なされます

上人　それ其處の床の上に、自分の涙に食べ醉うて

乳　おゝこれは丁度、お嬢樣と御同樣、丁度御同樣て入らせられます

上人　二人が二人同樣の有樣とは、おゝ不憫なことぢやなア

乳　お嬢樣も泣いつ口說いつ、口說いつ泣いつ、此通りに泣倒れてゝムります、コレお起き遊ばしませ、男ならお立ちなされませ、ヂユリエット樣の爲めてムります、さ、さ、お起上り遊ばしませ、何故そのやうに、お〳〵お呻吟なされます

ロメ　コレ乳母

乳　嗟々、死んて花實が咲くものかいのう

ロメ　ヂユリエットの噂を致したが、ヂユリエットは如何致した、獄を成して日もまだ淺いに、彼女が近親の血を流したる我身をば、不敵の凶

漢とは思やらぬか、何處に何うして居らるゝぞ、二人が中の破れし戀を、彼のわが忍び妻は、何と云うてであつたぞ

乳　おゝ何とも仰せられず、たゞ泣きに泣いて、臥床の上に、かつぱと御身を投ると思へば、又すつくと起上り、タイバルトと御呼びなされ、ロメオ〳〵と御泣き遊ばし、又々お倒れなされます

ロメ　それでは丁度、ロメオと申す名が、鐵砲の筒口から彈出され、彼女を斃した樣であらう、其名の主の忌まはしの手が、彼女の近親を殺しゝやうに――おゝ上人、此躰軀の何處に、某の名は宿つてゐるか御話し下され、其厭はしの宿り家をば、打碎いて呉れませう程に

とロメ抜劍する

上人　遽てめさるな、先づ〳〵控へい、それでも卿は男子なるか、姿を見れば、いかにも男子、其涙は女の樣な、其荒々しい擧動は、非情の獸の暴るゝ樣、男と見えて女、人間と見えて獸げにあやしきは卿の心、此樣にさもしき卿とは思はざりしに――卿は既にタイバルトを殺し、今又己れを殺さむとするか、さて卿が生存を賴みてのみながらへる、デユリエットをも併せ殺さむとするか、何故そのやうに天を恨み地を恨み、己が出生を憤るぞ、天、地、出生、此三つの者が相合して、卿此世に出てしなるを、卿は其を擲たむとや、止めよ〳〵、卿は己が姿を辱かしめ、己が戀を辱しめ、己が智慧を辱かしむると申すもの、かゝる寶を一身に貪り集めながら、用ふべき所に用れば、いかばかりの光彩をか添ふべきに、それを用ふることもなさぬとは、卿の姿は蠟細工、生氣ある一男兒とは思はれず、卿の戀は空誓文、愛せむと契りし人を殺さむとす、卿の智慧